



3

0053234-000

271-138

児童の心理と家庭教育講話

石川七五三二・著

名古屋教育研究会

昭和7

AHP

この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第67条の規定に基づき、平成12年5月1
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

長 研 究 育 教 屋 古 名
 著 五 七 川 石
 と 理 心 の 童 兒

話 講 育 教 庭 家



行 發 會 究 研 育 教 屋 古 名



271-138

序

我が子の教養の爲に、日夜心をくたくお母様方やお父様方に、この拙い小著を捧げたいと思ひます。

子を思ふ親心こそ、家庭教育振興の原動力であり、その力を導く理智の光こそ、家庭教育改善の道しるべであります。偉人を生める家庭には、偉大なる母の、熱烈なる愛情と、明瞭なる慧智と、そしてたゆまざる努力とがありました。

親子の情愛は自然に恵まれて居ります。たゞこの力を導く理智の光と、それを押し続ける意志の力とを、われ／＼は、修養によつて、かち得なければならぬのであります。我が子の心のほんとうの特色を、正しく見つめる力、これこそ我が子を幸福に導く最大の力であります。そこに我が子の正しい導き方の道しるべを見出し得るからであります。

どうしたならば、子供の心の特色を、正しく見つめることが出来るのか、そしてこれを

幸福に導くことが出来るのか。私はそれを専心に研究する爲め、児童心理の研究と、家庭教育の指導との、二つの仕事を本務とする、児童研究所長の公職にたづさはること既に五年、その間常に、我が子の教養に心をくだくお母様方やお父様方の切なる訴へを聞き、その導き方について、共に研究して参りましたが、公務繁忙の折から、つひにこれをまとめる機会を與へられなかつたのであります。

幸にしてこの度、やうやく自由なる天地に解放せられ、静かに顧みて、私の研究と體驗とをまとめるべき、しばしの餘暇を恵まれましたので、こゝにこの小著をまとめることになりました。微力ではありますけれども、児童心理學の研究と教育相談の實際とを擔當しなければならなかつたばかりに、今こゝに、かうして、最新の知識と、最善の方法とをこの處女作に綴り、これを普く全国各地の家庭にお傳へすべきいさゝかの自信を得るに至りましたことを、深く感謝するものであります。

私はどこまでも、家庭の皆様と膝を交へながら、しんみりとお話する氣持で、この新し

い研究と、得難い體驗とを綴り合せて行きました。殊に私が、多數の児童について、いろいろの方面から、實驗的に研究いたしました、ほんとうに日本的な研究資料を、出来るだけ澤山採入れまして、それを、私の取扱ひました多數の教育相談の實例に結びつけながら出来るだけ平易に、児童心理の要領と、家庭教育の大本とを得會していただくやうにといふ念願で、筆を進めることに、苦心いたしました點は、この小著の世に送らるべき、さややかなる特色の一つかと存じます。

たゞ恐れますことは、多年の間、児童心理學に關する、學術論文の發表にはかり力を入れて居りました爲に、かやうな平易な叙述といふことに對して、至つて不馴れなところから、ずいぶん努力はいたしましたし、やつぱり所々持前の、かたくなる論文式の、お話しを進め方が出てゐるのではないかと思はれる點であります。幸にして、これまで、各地の教育者の講習會とか、父兄會、母の會等の講演、又はラヂオの家庭教育講座の放送でしばしば話させていたとききました經驗をそのままに、何卒皆様、私の話をお聞き下さるやうな

樂なお氣持で、讀んでいたゞけるならばとそれのみ念じて居ります。

序篇では、家庭教育にたづさはる皆様に對して、われ／＼児童心理學專攻の者の側から、そして特に、家庭教育相談の實際にたづさはる者の側から、是非注意していたゞきたいと思ひます希望の數々を述べて居りますが、ほんとうに立派な子供を育て上げようと熱望する方々は、こゝに述べてあります私共の希望を、是非實現していたゞきたいと思ひます。

上篇では、人間一生の土臺を作るところの、最も大切な幼児期にある子供の心の特色の見方と、導き方とを述べて居りますが、この時期が、特に家庭教育上、一番大切な時期であり家庭教育の主力が、こゝに注がなければならぬものであるといふ意味から、この篇を最も詳しく述べた次第であります。

下篇は、幼児期に作られた土臺の上に、いよく立派な人格を築き上げて行くところの建設時代ともいふべき、小學校時代の児童、即ち學童の心の見方と導き方とを説いて居り

ますが、特に、家庭教育といふ立場から見ても、最も必要なと思はれる、主なる方面について、詳しくお話することを主眼として、筆を進めたものであります。

附篇は、少し六ヶしいかも知れませんが、丁度身體の發育については、毎年身體検査を行つて、その成長の程度を知り、その結果にもとづいて、適當な養護の方法を講ずると同様の意味で、精神の發達についても、やはり毎年一度、精神検査を行つて、その發達の程度を知り、その結果にもとづいて、適當な指導方法を講ずることが最も望ましいことであるといふ、私の持論にもとづきまして、家庭で出来る程度の、いろ／＼の心の診斷法の實際について、述べたものであります。

書き終つて、一わたりこの小著を眺めました時、私はまだ／＼説き足りないところのあることを感じました。然し、家庭教育といふことを中心として、然も児童心理の一般を了解していたゞくといふ點から考へますと、先づ／＼この邊で満足しなければならぬので

はないかと存じます。幸にして、この小著によつて、皆様が、児童心理學に對して深い興味を持たれ、かつ子供の教育上ほんとうに必要な學問であり、然も決して六ヶしいものではないといふ信念を持たるゝやうになるならば、誠に光榮の至りと存じます。そして、この小著を一の入門書として、更に奥深い児童心理學の研究へとお進み下さることを、子供の幸福の爲に、切望して止みません。私はこの入門書ともいふべき小著によつて説きつくせなかつた部分を、近く刊行するところの、「教育的児童心理學」において、充分述べさせていたゞきたいと思つて、既にその稿に取りかかりました。どうぞこの小著の不備なるところはやがて世に生れ出づべき「教育的児童心理學」について御研究下さるやう切望いたします。

尙この講話は、家庭教育といふことを中心としてお話を進めて居りますけれども、家庭教育において大切な原理は、同時にまた、幼稚園でも、小學校でも大切な原理なのでありますから、家庭といはず、學校といはず、いやしくも児童を指導するといふ立場にある、すべての人々に對して、この小著の趣旨を理解し、實行していただゞきたいといふ念願を以

て筆を進めたものであります。

殊に、幼稚園や學校の教育の効果は、家庭と密接な聯絡を保ち、むしろ進んでこれを指導するところまで行つて、始めてその眞價を發揮するものと思はれますから、この小著に詳しく述べました、私の研究と體驗とを、母の會や、父兄會や、學級懇談會などの機會を利用して、教育者自らの講演としてお話し下さるならば、私の光榮と歡喜とは、更に大なるものがあります。

更に最近では、文部省自ら率先して、家庭教育の振興を叫び、その指導者の養成に力をつくされるやうになりましたが、これらの指導者、社會教育者の方々に對しても、私は、一層児童の心理と家庭教育の問題に關する、新なる研究を切望いたしますと、もに、この小著がこの時代の要求に對して、何等かの貢獻をいたすことが出来れば、この上ない幸福と存じます。

私はたゞく、世の多くの児童が、ほんとうに幸福になれるやうにといふ念願から、児童の心の正しい見方、と正しい導き方との、研究と指導との爲に、その生涯を捧ぐべき更生の首途の記念に、之の小著をものして、世の児童指導の大任に當る方々に送る次第であります。

中京の聖地、覺王山のほとり

教育研究所の研究室にて

昭和七年中秋

著者 識す

目次

序篇 家庭教育者の心の準備

第一講 家庭教育に就いて両親に望む……………(一)

一 正しい教育愛……………(一)

親子の愛—理智の光—意志の力

二 親の再教育……………(七)

児童の研究—家庭教育の目標—家庭教育の方法

三 心の健康診断……………(二六)

健康の順序—診断の尺度—調査記録

第二講 生れつき……………(二六)

一 瓜の蔓には茄子は成らぬ……………(二六)

教育の力の限度——遺傳 優秀な家柄——低能者の家系——血族結婚

親の因果が子に報いる——不具兒の先天遺毒——低能兒の三分の二は先天遺毒

第三講 育ち……………(四六)

一 氏より育ち……………(四六)

環境の力——低能兒を作る恐しい病氣——三つ子の魂百まで

二 孟母三遷の訓……………(五一)

文藝を讀べ——屋内に閉ぢこめられた一人兒——孟子の母——社會の力

上篇 乳幼兒の心理と家庭教育

第四講 乳兒の心理と家庭教育……………(五九)

一 心の芽生え……………(五九)

混沌たる心——本能・衝動

二 乳兒の教育的な取扱ひ方……………(六四)

愛らしい赤ちゃん——腫病な子——怒りつづいて子

第五講 幼兒の言葉……………(七四)

一 幼兒の言葉の發達順序……………(七四)

乳兒から幼兒へ——言葉の準備時代——片言時代——單文時代——複文時代——

抽象文時代——言葉の教——言葉の吟味——自己中心の言葉——社會的な言葉

二 幼兒の發音の發達順序……………(九四)

易から難へ——最も遅いラ行

三 幼兒の語彙發達の順序……………(九九)

論の關係と發表——個物期——活動期——關係期——性質期——情感期

第六講 幼兒のお話……………(一〇五)

- 一 幼児の好きなお話……………(一〇五)
- お話を求める心——幼児の記憶と實生活のお話——幼児の想像とお話
- 二 幼児の嘘言……………(一一四)
- 怖い話につく嘘——怖くてつく嘘——利益でつく嘘——嘘は習慣にならぬうちに直せ
- 三 幼児の質問……………(一二三)
- 新しいことを知らうとする心——幼児の聞きたがること——質問の要する方
- 第七講 幼児の遊び……………(一三六)
- 一 ひとり遊びと玩具の教育……………(一三八)
- 遊びは幼児の生命——幼児の想像と遊び——ひとり遊びの時代——玩具を興へる時の注意
- 二 仲間遊びと社會心の芽生え……………(一三八)
- 仲間を求める心——仲間遊びを始める時期——社會心の養成

三 遊びと幼児の本性……………(一四一)

十八十色——遊びに現れる幼児の本性

○ 第八講 幼児の繪と歌と踊……………(一四八)

一 幼児の美感……………(一四八)

藝術心の芽生え——美感の養成

二 幼児の繪……………(一五三)

智識の發達を物語る繪——描畫の段階——描畫に現れる美感

三 幼児の歌と踊……………(一六二)

リズムを喜ぶ心——幼児の歌——歌のリズムから運動のリズムへ——幼児の踊

○ 第九講 幼児の情緒と本能……………(一七二)

一 臆病な子供の原因と矯正法……………(一七二)

臆病の原因——大きな音——「いけません」——幼児の怖がるもの——臆病の矯正法

二 怒りつばい子供の原因と矯正法.....(一九〇)

怒る原因——亂暴な子供を直した實例——幼児を怒らせる事柄の調査——幼児を怒らせない方法

三 蒐集・好奇・同情・統率本能の指導.....(二〇六)

集めたがる本能——試みたがる本能——同情——お山の大神籠取り

第十講 幼児の一般的特色と家庭教育.....(二一八)

一 智能の現れ.....(二二八)

幼児の特色の概観——言葉の力——智能検査法

二 自己中心性.....(二三五)

我がまゝ——反抗

〇 下篇 學童の心理と家庭教育

第十一講 學童の特色と家庭教育.....(二三〇)

〇 一 學童の心理的特色.....(二三〇)

幼児から學童へ——遊戯から學習へ——衝動から意志へ

個人から團體へ——物象から理想へ——性能の分化

〇 二 學童の家庭教育方針.....(二三七)

よく遊びよく學べ——よく學びよく遊べ——長い続

無理は禁物——特色の發見——不夏化の用心

〇 第十二講 學習の指導.....(二四九)

一 上手な勉強法.....(二四九)

百聞一見に如かず——好きこそ物の上手なれ——骨折損のくたがれ儲け

二 勉強の奨励法.....(二五三)

褒賞——叱責

〇 第十三講 氣質と性格.....(二五七)

一 氣質と性格の観察法……………(二五七)

四氣質—内向性・外向性—性格

二 氣質と性格の教育……………(二六四)

品性—人格

第十四講 興味と理想……………(二六七)

一 興味の型……………(二六七)

興味の種類—興味の發達—興味の承継

二 理想的人間の種類……………(二七三)

生活型式—興味型と生活型式

第十五講 智能の新しい見方……………(二七六)

一 優秀兒・劣等兒の新しい見方……………(二七六)

偏知主義教育の餘弊—智能三方向説

二 劣等兒が成功した實例……………(二八五)

低能兒といはれたエチソン—劣等生が發明家—劣等兒が機械專家

三 劣等兒の導き方……………(二九一)

得手を探せ—自尊心

第十六講 將來の方針の決め方……………(二九三)

一 學校選擇……………(二九三)

時勢の推移と子供の將來—學校の種類と子供の能力

二 職業選擇……………(二九五)

職業の種類と性能—適材適所

第十七講 異常兒の心理と家庭教育……………(三〇一)

一 低能兒の心理と家庭教育……………(三〇一)

早期發見—特別指導—治療教育

二 不良児の心理と家庭教育……………(三〇四)

不良児の大部分は劣等児——意志薄弱——悪い環境

三 聾啞児の心理と家庭教育……………(三二六)

聾——口——話——智——能

附篇 家庭で出来る心の診断尺度

第十八講 幼児言語發達検査法……………(三三三)

一 發音發達検査法……………(三三三)

準備——検査方法——採點法——發音發達程度の表し方

二 語彙發達検査法……………(三三三)

準備——検査方法——評價方法

第十七講 幼児智能検査法……………(三四九)

簡易智能テスト作製の目的——準備——検査方法——採點法——智能評價

第二十講 興味型検査法……………(三四四)

準備——検査問題——検査方法——採點法——興味型の評價

附録

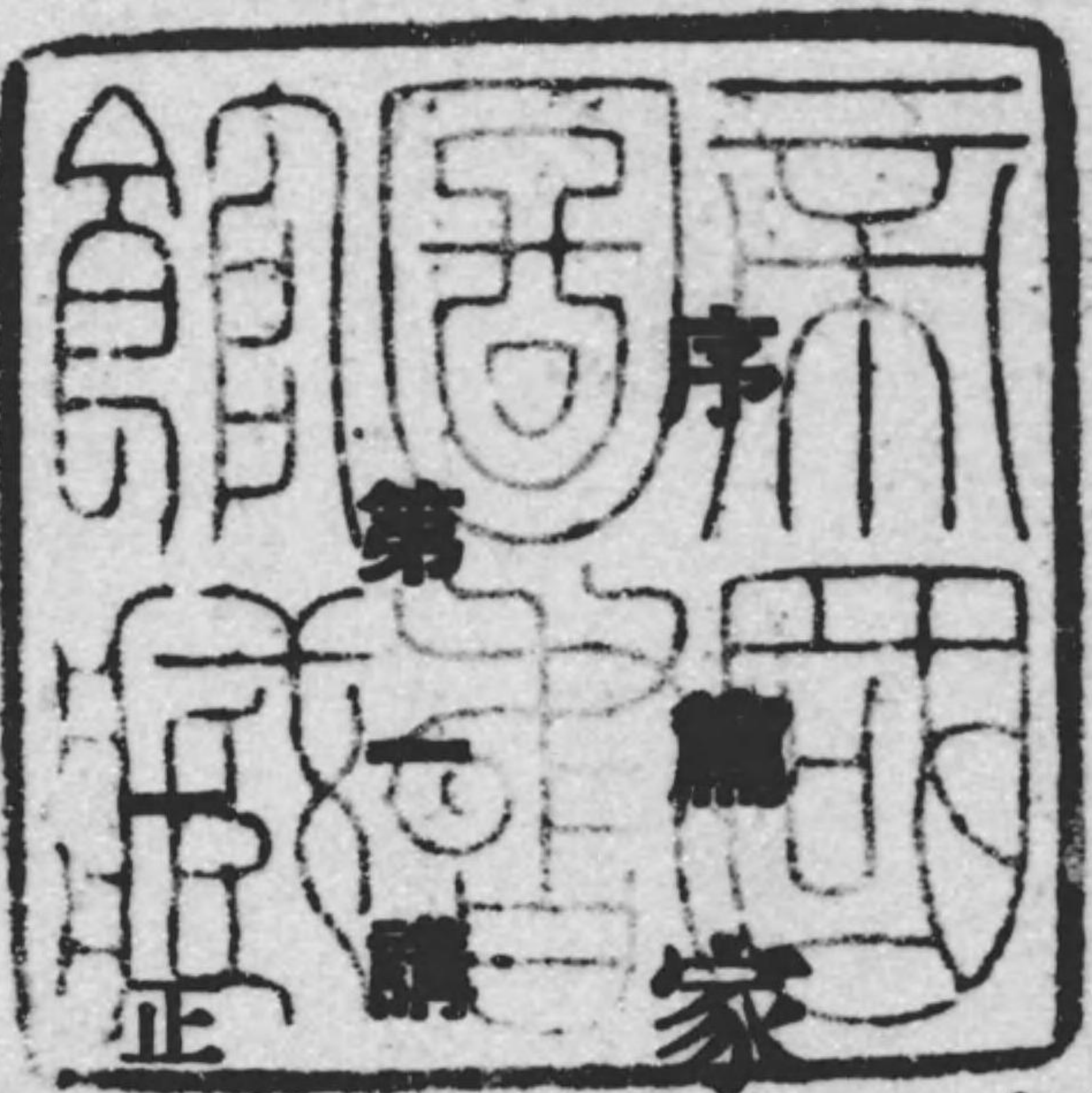
筆記 積木遊び——ま、ごと——人物——猿の智慧

第一圖——第二圖——第三圖——第四圖——第五圖

目次終

児童の心理と家庭教育講話

名古屋教育研究所長 文 士 石川 七五三二



家庭教育者の心の準備

家庭教育について両親に望む

しい教育愛

親子の愛 強く、賢く、朗らかにと、我が子の成長を朝な夕なに、神かけて祈る親心、それは世の何物にもかへがたい、人間自然の、尊い心のあらはれであります。我が身の疲

家庭教育について両親に望む

れも、眠さも、ひもじさも、一切打忘れて、我が子の看病に一身を捧げる母の純情・熱愛犠牲、この心こそ、ほんとうの家庭教育の源泉であり、原動力でなければなりません。

親子の愛情は、かくも自然であり、強烈であるだけ、もし一たび、その激しい愛情の流れの方向をあやまるならば、親子もろとも、その流れの中に溺れて、生涯泣きの涙で暮らさなければならぬといふ、悲惨な運命にまきこまれることも、しばしば起るのであります。あやまつた親の愛情が、いかに多くの子供らをそこなひ、その親を苦しめるものであるかといふ、生々しい経験は、これから講をかさねるに従つて、次第々々に展開されて行くであります。

親子の愛は自然だからといつて、これに溺れてしまふやうな、可愛がり方をするといふことは、家庭教育上つしまなければならぬことは、いふまでもないことでありますが、それかといつて、自然の愛情を殺してまでも、わざと冷たくしなければならぬやうな、餘りに嚴格すぎる親の態度もまた、子供の教育上、決してよい結果をもたらずのものではあり

ません。

叱言の多すぎる母親、やたらに怒鳴りつける父親、それは、たとへ、その子を立派に育て上げようとする、熱心な親心から出發するものであるにしても、かやうな叱言と怒鳴り聲との絶え間のない家庭の中に、育て上げられる子供らは、知らず／＼の間に、氣をつかひ、心をいため、いつの間にやら朗らかな心も消えうせて、いら／＼した、ひねくれた、暗い氣持の子供になつてしまふといふ、氣の毒な實例を、私は幾たびも／＼見せつけられて参りました。

理智の光 愛に溺れず、嚴に走らず、温かい心をもつて、我が子の心をうるはしく、はぐくんで行くところの、ほんたうの家庭教育は、自然に恵まれた、熱烈なる親子の愛情を明るい理智の光をもつて導いて行くところに、はじめて與へられるのであります。可愛がりすぎて、甘やかしてしまつた子供の將來は、果してどうなるか。怒鳴りつけてビク／＼者にしてしまつた子供の將來は果してどうなるか。靜かに、胸に手をあて、し

ばしの間、これを考へるゆとりが、その親に許されるならば、その子は、ほんたうに幸福であります。親はきつとくその明るい理智の光をもつて、その子の行く末を考へて下さるからであります。

われ／＼は、ほんたうに、眞剣になつて考へなければなりません。どうしたならば、強く、實く、朗らかな子供を育てあげられるかといふことを。そして、それを考へるだけの尊い理智の光を、われ／＼は生れながらにして與へられてゐるのだといふ、強い自覺をもつて、我が子の幸福のために、その光を、いやが上にも照り輝やかすことを努めなければなりません。

昔から、偉人を生んだ家庭には、その子の隠れたる才能を見出すところの、鋭い理智の光が閃いてゐたといふことを、われ／＼はしばしば聞かされて來てゐます。彼の發明王と云はれた、世界の偉人、エヂソンを生んだ家庭を御覽なさい。小學校へ入つて間もなくこの子は低能兒であると折紙つけられたそのエヂソンの心の奥底に、小學校の先生の見出

し得なかつた、ゆたかな天分を發見して、この子は決して低能兒ではないと斷定したものは、果して何であつたか。それは、眞剣にその子の心を見つめるところの、エヂソンの母その人の、明朗な理智の光に他ならなかつたのであります。

意志の力 家庭教育の根本は、かやうにして、子を思ふ親の熱情と、子を見る親の明とによつて培はれるのであります。然し、いかにそのことを知つてゐても、その知つたことを實行するところの、強い意志の力がこれに伴はなければ、折角の愛も、光も、その實を結ばずに終るのであります。

甘やかせばどうなるかといふことを、充分知つてゐても、子供にせがまれると、つい、今度だけはと、折れてしまふやうな、意氣地なしでは、ます／＼子供につけこまれて、一そうやりにくくなります。その時、これぢやならぬと、固く決心して、どうしてもかうしなければならぬものと知つたことは、必ずそれを實行するといふ、強い意志を、ふるひ起すならば、子供はきつと救はれます。

エジソンの母が、可愛い我が子の心の中に秘められた、尊い天分を見抜くだけの、立派な理智の光を與へられたわけではなく、さうと知つたならば、必ずこの子の天分を導いて、世界一の大人物に仕上げなければやまぬといふ、固い決心をもつて、エジソンの教育に、日夜奮闘努力するだけの、強い意志の力をもつた賢夫人であつたといふことを、われは忘れ得ないのであります。この強い意志の力があつたればこそ、折紙つきの低能兒も、やがて世界一の發明王となるべき、立派な天分を、その慈母の膝下とで、すくすくと伸ばしてもらふことが出来たのではありますまいか。

熱烈なる親子の情愛と、明朗なる理智の光と、そして、鞏固なる意志の力、この三つの働きが、三拍子そろつて、最も調子よく、のつてゐる家庭こそ、ほんとうに強く、賢く、朗らかな兒童をはぐむところの、理想的な家庭であります。世の母親に望むところの、正しい教育愛、それは、盲目的な母性愛から目覺めた、かやうな調和的な教育愛を意味するものであり、この正しい教育愛によつてのみほんとうに幸福な子供がはぐまれるのであります。

二 親の再教育

兒童の研究 しかれば、正しい教育愛を、家庭に植ゑつけるには、どうしたらいいか。立派な親は、とうにそれを知り、かつ實行して居られるであります。けれども、世の中には、さやうな立派な親ばかりとは限りません。そこで、正しい教育愛に目覺めさせるための、親の再教育といふことが、近頃盛んに叫ばれるやうになつて來たのであります。多くの親たちは、すでに、人の子の親としてわきまへなければならぬ、いろいろの事柄を、學校で學んで來てゐるはずであります。けれども、それらの親が、學校で教育を受けてゐた時代からみれば、今日の時代といふものが、ずるぶん進歩して居ります。その進歩した今日の世の中に生活する子供らは、どうかすると、「お母さんの考は古くさい」など、いつて、一本やりかねない程までに新しい文明の空氣を吸つて居ります。

そこで、母も、父も、子供らとともに、新しい時代に生き、新しい知識にふれなければならぬ必要が、當然起つて来るのであります。ことに、子供の心の見方とか、その導き方といふやうな、家庭教育上の、直接な問題に関する、新しい學問の研究結果といふものについては、特に深い注意を拂はなければならず、また拂はせるやうに、仕向けなければならぬのであります。新しい時代に生きる子供らを、新しい方法をもつて、正しく指導するために、先づ両親の教育から始めなければならぬといふ、両親再教育の機運が、ますます盛んになつて来たのは、このためでありませう。

アメリカのワットソンといふ兒童心理學者が、今日の親に、次のやうな三種類があるといつて居りますが、お互に、果してどの種類に屬するかを考へてみることも、あながち無益なことではありません。

(1) 祖先傳來の育て方で、子供は結構育つもの、欲しがるだけの食べもの、温かい着物と、夜露をしのぐに足る屋根と、これだけ與へさへすればそれで充分、何も事新し

く、育兒法なんて知る必要があるものかと考へてゐる親ども。

(2) 我が子に對して、ありつたけの世話をやき、身のまわりを出来るだけ氣持よくしてあげて、思ひつきり可愛がること、育兒の秘訣だと考へてゐる親ども。

(3) 子供を育てるといふ仕事は、ありとあらゆる世の中の仕事の中で、一番六ヶしい仕事であるといふことに氣がついて、この六ヶしい仕事をなしとげるためには、單に生れつき持つてゐる親の愛情だけではいけない。もつともつと子供そのものに對する、科學的知識を積まなければならぬと、深く自覺してゐる親ども。

そしてワットソンは、この第三の種類の親を、最も進歩した親であるといつて居ります。子供のからだはどんなものかも知らずに、服をとつたり、藥を盛つたりする醫者があつたら、人々はそれを醫者といつて笑ふでありませう。けれども、子供の心はどんなものかを、よくも知らずに、之を教育しようとしてゐる親を見ても、人々は何等不思議としな

心理を研究しようと努める母親こそ、ほんとうの家庭教育者であると断言した所以も、こゝに存するのであります。

かくて、正しい教育愛をもつて我が子を導かうとする者は、先づその子の心の姿を、正しく読みとることに精進しなければなりません。今日、親の再教育を行はんとすれば、先づその親に、児童の心理を説かなければならぬとされるやうになつたのも、このためであります。これから各講をさうて述べようとする、児童の心理は、かやうな意味から、新しい時代の親の再教育に捧ぐべき、一つの資料たらしめようと念じつゝ、説き進められるものであります。

★家庭教育者の目標 子供の心理を知るといふことは、子供はどうして臆病になるのか、どういふわけで学校の成績が悪いのかといつたやうな、現在の子供の心の状態と、その状態をもたらした原因との間の關係を探り、或はその子供の將來伸びるべき天分が、何れの方面に見出されるかを診断するなど、すべて事實ありのままの子供の心の特色を明かにす

ることを本體とするものであります。かやうにして知られた子供の特色を、どういふ方面に、どうして導くのが最もよろしいかといふやうな問題になりますと、今度は、家庭教育の目的と、その方法といふ事柄になるので、両親はそこで、特に家庭教育といふ立場から、この目的と方法との二つの問題に関する再教育を受けなければならぬことになります。家庭教育は、教育といふ大きな働きの中の、一つの方面である以上、我が子をどんな人間に育てあげようかを決める場合の、家庭教育の目標の定め方は、一體子供を何のためか教育するのかといふ、教育そのもの、目標の定め方によつて、きめられなければならぬのであり、その意味で、親は教育の目的は何であるかといふことについて、一通りわきまへておく必要があるのであります。

人を教育する目的は、結局、立派な人間を作り上げるといふことで、立派な人間といふのは、世の中に立つて、一人前の生活の出来る、立派な人格をそなへた人間といふことでもあります。

でありますから、親は先づ、その子が將來飛びこんで行くところの、世の中とか、社会とかいふものは、どんな人間が立派に一人前の生活をなしとげられるやうに出来てゐるかを、よく研究して、その生きた社会が要求するところの、人間のいろ／＼の才能といふものを、我が子の中から見出し、それを育てて行くことをもつて、家庭教育の一つの目標としなければなりません。

例へば、昔の社会は、學歷のあるものとか、物識りとかを要求するやうな、知識萬能の偏知的な目標をもつた社会であつたために、學校を出さへすれば、大學を卒業しさえすれば、それで立派に世の中に立つて、獨立した生活をして行けるやうな具合に出来てゐたところから、子供がどんな天分をもたうと、そんなことには無頓着で、やれ家庭教師だ、やれ準備教育だといつては、この家庭でも、先づその子供らに知識を教へこむこと、むりやうに詰めこむことに、日もこれ足らぬといふ有様、そして、猫も杓子も、中學校に入れないや、高等學校を受けさせなければ、大學を卒業させなければといふことを目標とする

やうになつたのであります。

その結果はどうなつたのでありませう。いはゆる高等遊民が、どこにもかしてにも、あふれるやうになつたやありませんか、これではいけない。もつと／＼實力を尊重する社会たとへ學歷はなくとも、その人その人に恵まれた、いろ／＼の天分を充分に發揮して、その實力によつて成功の出来るやうな社会にしなければならぬといふ考が、社会の中から芽生えて来て、詰込主義を廢し、偏知教育をしりぞけ、もつと／＼實際的な實力を尊重するところの、實力主義、個性尊重主義の教育が重んぜられるやうになり、社会一般の要求も、必ずしも學校出とは限らず、實力本位で人物を採用するといふやうに變つて参りました。かやうな世の中の動き、言ひかへれば、これからの社会は、どんな人間を要求するのかといふ、社会そのもの、目標なり、教育の目的なりといふもの、移り變りについて深く考へ、社会に出く立派に獨立の生活の出来る人間といふのは、どんな人間なのかといふことを明かにするといふことは、家庭教育の目標を定める上において、非常に大切なことと思

はれますから、親はこの點についても、充分再教育を受ける必要があるのであります。

それから、立派な人格を作り上げるといふことは一體どういふことか。これに就いても一通り研究しておく必要があります。どんなに立派な天分なり、才能なり、實力なりをもつて居りましても、その人柄が立派に出来てゐなければ、たとへ世の中に立つて、獨立の生活はしてゐても、ほんとうに立派な人間であるとはいはれません。善いことを好み、悪いことを憎むといふ、純な道徳的情操をそなへた氣高い人柄、日本國民としての資格を充分にそなへた、立派な日本人といふやうに、いろいろ研究しなければならぬ方面があります。それらについて研究するといふことが、又大事な親の再教育の仕事になるのであります。

家庭教育の方法 我が子の特色・缺點が、どんなところにあるか、そしてその子供を、どんな人間に仕上げるやうに努力するのが、現代の家庭教育の目標であるかといふことの研究が出来たならば、次に、それでは、どうして、そのやうな子供を、そのやうな人間に仕上げて行くのかといふ、教育の方法についての研究が必要になります。

子供は百人百色で、同じ両親から生れた兄弟でも、必ずしも同一の特色をもつてゐるとは限りません、従つてその教育の方法も、一人々々について皆ちがふのが當り前でありまして、長男を育てる時に成功した教育の方法が、そつくりそのまゝ、次男の時にも、うまく當てはまるとは限らないものであります。

そこで、大體こんな特色をもつた、かういふ年齢の子供は、かういふ方法で導くのが一番よろしいといつたやうな、子供の特色と年齢とに應じた、一般的な指導方法について一通りの知識を習得するとともに、その一般的知識を土臺とし、大本として、それを、我が子の實際の教育に、うまくあふやうにあてはめて行くところの、特別の工夫をこらし、それを實際に施した結果について、よくその得失を反省し、短をすて、長を採つて行くといふ親の努力の中に、始めてほんとうの家庭教育の方法が見出されるのであります。

結局は、親自身の、教育の熱と、光と、力との問題に歸するのでありますけれども、その正しい教育愛を、少しでも立派なものとして働かせるために、親は、先づ一般の子供の教

育方法に關して、再教育を受けることが、最も大切なことのやうに思はれます。これから述べます、いろいろの問題の中に、いろいろの家庭教育の方法の説かれて居りますわけはかやうな考から、家庭教育の一般的な方法に關する資料を、少しでも多く集めて、世の親に捧げ、世の親達が、その中から、我が子に最もよく適した教育方法を發見することが出来て、一人でも多くの子供が、ほんどうの家庭教育の恵みをうけて、一層幸福になれたならばといふ望みに他ならないのであります。

三 心の健康診断

發達の順序 芽が出て、葉が出て、莖が出て、それから花が咲いて、實を結ぶところの植物の生り立ちにしても、通へば立ち、立てば歩んで、又走り出すといふ、赤ちゃんの生ひ立ちにしても、皆それ／＼一定の順序といふものがあつて、成長し、發達して行くものであります。子供の心の發達にもまた同じやうに、一定の順序・段階のあるべきことは、

いふまでもないことであります。

目方が足らぬ、脊が伸びぬといつて、我が子の中からだの發育狀態を心配する時、その親は、さつと、この年頃の子供では、大體これ位の目方が、丈がなければならぬはずだと、自ら赤ん坊の體重や身長に關する、發育標準を考へながら、その標準に比べて、どれ位劣つてゐるか、どんな程度まで伸びて來てゐるかを究めようとしてゐるに違ひありません。心の場合においても、同様の發達標準といふものがありまして、その標準に比べて、その子が劣つてゐるか、優つてゐるかを診斷することが出来るのであります。丁度醫者が、子供の脈搏を數へたり、體温を計つたり、聽診したり、打診したりして、その子供のからだに異常がないかどうかを診斷すると同じやうな意味で、心理學者が、子供の言葉の發達に異や、繪をかく能力の發達などを、一々の検査法で検査した上で、その子の精神の發達に異常がないかどうかを診斷するのでありますが、かやうな場合には、醫者でも、心理學者でも、皆それ／＼その検査する事柄についての、發達の順序を表した標準といふものをもつ

てゐて、それに照し合せて、その子が年齢相應の發育なり、發達なりをとげてゐるかどうかを調べるのであります。

かやうな心の診断といふことは、からだの場合と同様に、轉ばぬ先の杖といふ考へで、常日頃心がけておくことが大切でありまして、病氣になつてから醫者に診断してもらふといふことよりも、健康な時に、一定の時期をきめて、その發育状態や、健康状態を診断してもらつておいて、病氣にかゝらぬやうな注意をするといふことの方が、一層賢明であると同じやうに、落第してしまつてから、あの學校を受けさせなければよかつたと愚痴をこぼしたり、からだをこわしてしまつてから、あんなに勉強させなければよかつたと後悔したりするよりは、受験させる前に、果してこの子供が、その學校の試験を受けるだけの、生れつきなり、實力なりがあるものかどうかを、一定の標準の精神検査法で検査してもらつて、その心理學的な診断の結果によつて、その子の入學なり、勉強の程度なりを決める方が、どんなに賢いやり方であり、又子供の幸福になる方法であるか知れません。

私はかういふ意味から、日頃、心の健康診断といふことを、しきりに唱道し、これまで取扱つて来た、又現在も取扱つてゐるところの、家庭教育相談に來られる、多くの兩親達に、絶えずそれを奨め、かつ實行してもらつて居ります。私の理想としては、毎年一回一定の時期をきめて、教育相談所を訪問し、子供の心のいろ／＼な方面の働きの發達程度を診断してもらつて、その結果についての、適當な指導方法を相談するやうに、各家庭が目覚めて來られることを望むものであります。

幸にして、數年以來唱へて來ました、私のこの主張が、漸く報いられまして、近年は、教育相談所を、健康相談所と同じやうに考へて、必ずしも困つた時ばかりではなしに、「昨年の今頃参りましたが、今年はどんなに伸びて居りませう」といつて、心の健全なる發達の状態を、年々診断してもらふために訪ねるお母さま方や、お父さま方が、だんだん多くなつて参りました。

診断の尺度 かやうな心の健康診断は、家庭教育相談所の設けられてゐない地方の家庭

に對して、これを望むことは無理かも知れませんが、しかし、體温とか、脈搏とか、呼吸とか、尿とかの、素人でも調べられる範圍内の検査法を用ひて、それらの検査の結果から、大體の子供の健康の状態を、素人洗儀でもやらなければならぬ場合が起りませうし、又その程度で大體の見當をつけておく位のことなら、少し研究しなへすれば、大體の家庭において出来るものであるといふことと同じやうな意味で、少し研究しなへすれば、素人でも検査することが出来るやうな、精神検査法を用ひて、毎年一定の時期に、各家庭で、子供の精神検査を行ふといふことを試みるならば、教育相談所の設けられてゐない地方でも、かやうな心の健康診断を、或る程度まで實行することが出来るのであります。

その意味で、家庭でも實行出来るやうな、比較的簡単な、子供の心の診断尺度の幾つかの種類について、附篇の第十八講から第二十講にわたつて、詳しく説明してありますからよくこれを読んで、子供の心の發達の定期診断用の尺度として、充分活用せられることをお奨めいたします。たゞこの著書の目的や、内容の點から見て、いろいろの精密な診断尺

度を、一々述べる餘裕が許されてゐないために、小學校入學後の學童についての精神検査法などが、充分述べつくせないことを、遺憾に思ふものでありますが、それらのもつともつと詳しい検査法については、近く發刊するところの、拙著「教育的兒童心理學」を参照せられるやうお奨めいたします。

觀察記録 子供の心の働きの、いろいろの方面の發達の程度を検査して、その長所短所を發見し、それによつて適當な指導を加へて行くといふことは、家庭教育の方法として、極めて大切な事柄であります。しかし、今日の心理學の發達の状態では、子供の心の働きの一切の方面を、一々精密に検査するといふことは、到底望めないことでもあります。また學問的な検査方法の確立してゐない方面、例へば、感情の働きとか、意志の働きとかいふ方面の働きについては、子供の日常の生活に現れてゐる、いろいろの特色を觀察して、そこからその子供のほんとうの特色を發見するといふ用意が必要になつて來るのであります。

ことに、さういふ方面の子供の特色は、その日／＼によつて、移り變りの多いものでありますから、たゞ一度や二度の觀察だけで、この子はこんな氣質の子供だなど、早合點しないうやうに、折にふれ、時にのぞんで觀察したことがらを、忠實に記録して置いて、長い間の觀察記録の結果から、始めてその子の特色を結論するといふ態度が、最も望ましいものであります。

觀察した結果を一々記録するといふことは、なか／＼骨の折れることではありますけれども、しかし、毎日々々でなくとも、一週間に一遍とか、一ヶ月に一遍とか、春夏秋冬の四季に一遍とかいふやうに、偶に記録するつもりならば、決して骨の折れることはありません。一年に一遍でも、記録しないよりは遙かにましであります。例へば毎年々々その子の誕生日の晩に、親がその子の過去一年間の大きな出来事とか、變化とかいふものを記録して行くことにしたならば、その子の將來の發達を豫想し、その子の進むべき道を決定する上において、その記録がどんなに役立つか知れません。

子供の心の發達を、その幼い日から、出来るだけ忠實に觀察し、これを記録するといふことは、その子の將來を出来るだけ幸福ならしめようとする目的に他ならないのであります。子供等は、時々、學校では現さないところの特色を、家庭でさらけ出すことがあります。若しこの特色を觀察し、記録して置くだけの用意が、その子の家庭に出来てゐるならば、その子が尋常六年を卒へて、さて上級の學校を選ばうとする時、どんな種類の學校を選ぶべきか、若し實際の職業につけるとするならば、どんな職業を選んでやるのがよいかといふやうな、その子の一生の出發點をさめる、大事な問題をさめる時に、非常に役立つものであります。

私共が今まで、澤山の子供等の學校選擇とか、職業選擇とかの教育相談を受けまして、それらの子供の將來の方針をさめることに、努力する場合に、勿論専門の學問的な検査法も試みますが、それと同時に、必ず家庭においてその子が幼い時から、知らず／＼の間に選んでゐるところの特色について、その親から聞きたゞすことにして居ります。これは極

めて平凡なことのやうでありますけれども、子供の特色、ことに今日の心理学の力では、充分検査し得ない方面の特色といふものを、この質問の結果から発見することが、しばしばあります。

ところが、中には我が子の幼い時の特色などについて、ちつとも注意してゐない、或は注意してゐたかも知れないけれども、今では全く忘れてしまつてゐるといふ、親に出會ふことがしばしばあります。かういふ時、子供の観察とその記録といふものゝ必要であることを、痛切に感じさせられます。

子供の心の特色を慎重に診断して、その将来の方針を、最も適確に決定しようとする親は、是非その子の観察記録を残しておいていたゞきたい。それはたゞに将来において、その子の心の診断を確実ならしめるところの、貴重な資料となるばかりではなく、その子の大事な生活の歴史を残してやることにもなるものであつて、その子は必ずや成長の晩において、我が幼き日の寫眞を愛づると同じ気持ちで、その記録をなつかしむに違ひないからであります。

第二講 生れつき

一 瓜の蔓には茄子は成らぬ

教育の力の限度 立派な子供を作り、優良な子孫を残したいといふことは、すべての親の望むところであり、その望みがあればこそ、どこの親でも、その子の教育のためには、夜となく、晝となく、その心を碎き、その身を勞するのであります。

しかし、どんなに親が骨を折つても、又先生がどれ程努力しても、どうしても優等生にはなれないといふ、氣の毒な劣等生のあることを、われ／＼は知つて居ります。そこに何かしら教育の力を妨げるところの、大きな力があることに氣がつくでありませう。丁度どんなに汗水流して磨いても、石はやつぱり石で、どうしてもダイヤモンドのやうな、キラ／＼した強い、輝かしい光澤を出させることが出来ないといふことを知つた時、われ／＼

は、どんなに努力しても、石をダイヤモンドにすることが出来ないといふ、大きな事實の前は、ひれ伏さなければならぬと同じことでもあります。

しかし、どんなに汚い石でも、一生懸命努力して磨きさへすれば、ダイヤモンドの光澤は現さなくとも、すわぶん立派な艶を出すところの、綺麗な石になるものであることは、誰でも知つて居ります。

どんなに劣つてゐる子供でも、一生懸命努力して、教育しさえすれば、優等生にはなれないまでも、相當のところまで伸ばし得るものであるといふことは、多くの低能兒教育の實例から、これを斷言することが出来ます。そこに教育の力の偉大さ、家庭教育の重要さといふものがあるのであります。

たゞわれ／＼は、石は石、ダイヤはダイヤといふ、そのものに與へられた、或る特色とか、本質とかいふものを無視して、われ／＼の努力の萬能と信することが不合理であると同じやうに、低能兒と優秀兒とに與へられてゐる、或る本質といふものを無視して、すべ

ての低能児を皆優秀児にすることが出来るかのやうに、餘りに教育の力を萬能視するといふことも亦不合理であるといふことを知ればよいのであります。即ち教育の力といふものは一定の限度があつて、或る程度以上は、どうしても教育の力では行かないといふ境目のあることを自覚しなければなりません。

遺傳 しかれば、かやうに、教育の働きに、或る制限を加へるところのものは何か。それは先祖代々から、その子に遺し傳へられて来たところの、心の遺産即ち遺傳といふものであります。

昔から「瓜の蔓には茄子は成らぬ」といひまして、賢い親からは、賢い子供が生れ、馬鹿な親からは、馬鹿な子供が生れるものと、相場がきまつてあるといふのがそれでありませぬ。

子が親に似るといふことは、親子の顔つきや、體格好でみればすぐ判るのでありますが、これはからだの上の遺傳であつて、この方面は、比較的判り易いのでありますけれども、

心の方面の遺傳といふことは、直接外に現れてゐないことが多いために、なかく判りにくいものであります。しかし、今日では、いろいろの家系の研究や、親子の精神検査の結果などから、心の遺傳といふことが、充分認められるやうになつて参りました。

心の方面の遺傳について、今まで研究されたものは、大部分その賢さの生れつき、即ち智能の方面であつて、優秀な血統とか、低能白痴の家系とかいふ言葉で表されてゐるのがそれでありませぬ。従つてこの方面の實際の例は、澤山報告されて居ります。

優秀な家柄 優秀な家系として、よく引合ひに出されるものは、西洋では、進化論の唱道者として有名な、生物學者チャールズ・ダーウインの一族があり、我が國では歴史學者として有名な、笑作元八氏の一族があります。これらの家系では、代々立派な學者を生んで、それ／＼の學問の發達に、非常な貢獻をしたといふ點で、よく知られて居ります。現代では、鳩山一家の如きも、よく例に引かれるところで、父が博士で、その二人の子供は博士と大臣になつたといふことなどは、やはり、親子の間に、優秀な心の働さが遺傳され

てゐるものと見なければなりません。

低能者の家系 悪い方の例としてよく引かれるものでは、低能白痴の遺傳を、最も露骨に現してゐる、カリカクといふ男の例があります。この男は、アメリカの南北戦争時代に生きてゐた者で、自分は普通の働きをする者であり、その先妻も普通の女であつたが、その後妻が、低能者であつたために、その子孫に、はつきりと違つた、二つの血統が出来るやうになつたといふ、有名な例であります。即ち普通の能力をもつてゐた先妻との間に出来た子供の後は、子孫代々、普通の人間として世の中に出て、一人前の生活をする事の出来る人間ばかり生れて、今日まで榮えて來てゐるが、これに反して、低能な後妻との間に出来た子供の後は、子孫代々揃ひも揃つて、低能や白痴ばかり、それが今日まで、はびこつて來て、どれ程世の中に迷惑をかけ、厄介者扱ひされたかわからないといふ、珍しい家系であります。

遺傳といふものは、必ずしも、親子の間に直接に現はれるものとは限らないものでありまして、子供の代に現れなかつた特色が、孫の時代になつて始めて現れるといふことも、しばしば起るものであります。従つて、親は普通であるのに、その子に低能兒が出るといふことも、しばしば見うけられます。

かつて、兄弟七人の中、二人は生後間もなく死んでゐるので、どんな能力の子供であつたかは、知るによしないのでありますけれども、残つた五人が、揃ひも揃つて、全部白痴といふ、珍しい兄弟の相談者が來たことがありましたので、早速その家系を調べて見ましたところ、父親も母親も、ともに、普通の能力をもつた者であり、父の兄弟も、母の兄弟も別に變つたことがないが、たゞ、母親の姉妹二人とも、同じやうに、その第一子を、生後間もなく、亡くし、その第二子に同じやうな低能兒を生んでゐるといふことが判つたのであります。即ちその母と、母の姉妹との三人姉妹が、揃ひも揃つて低能や白痴の子供を生んだわけです。そこで更にその先を調べて見ると、果せるかな、それらの三人姉妹の母、従つて、今相談に來てゐる、五人兄弟皆白痴といふ子供等の、母方の祖母に當る

人が、うすのろであつたといふことが、判つたのであります。でありますから、親は普通であつても、祖父母に變つた人間があると、一代間を置いて、その孫に、變つた者が出来るといふ、さういふ遺傳の仕方もあるものであるといふことが、解るだらうと思ひます。かやうなわけで、優秀な子供が出来るものも、劣等な子供が出来るものも、その親代々の智能の優劣によつてきめられるといふことが、非常に大きいものでありますから、ほんとうに立派な子供をもうけようとすれば、先づ子供を作る前に、自分の妻とか夫とかいふ配偶者を選ぶ時からして、充分な注意を拂はなければならぬものであるといふことが納得されること、思はれます。

すでに過ぎ去つたことは仕方がないにしても、我が子の結婚の場合には必ずこのことを念頭において、優秀な子孫を得られるやうな配偶者を選ばせるやうに、その子を指導し、或は親自らその方針で、立派な配偶者を選んでやるといふことが、最も望ましいことであつたります。

血族結婚 親自身の心にも、からだにも、何等の異常もなく、その親の親にも亦別に變

つたところがないにもかゝはらず、生れ出た子供が、早死をしたり、生きのびても、劣つた心の持主であつたりする例が、世間にはしばしば見受けられます。

かつて私が取扱つた相談者の中に、かういふ實例があります。まだ若い夫婦でありました。だが、長女は生れて間もなく死んでしまつたが、次女はどうやら育て上げられて、六つになる今日まで、曲りなりにも、からだだけは伸びて來たけれども、どうも言葉づかひや、遊び方を見てみると、普通の子供に比べて、見劣りがするやうに思はれるから、若しかしたら、心のどこかに欠陥でもあるのではないか、その邊のところを充分診断してもらひたいといふのです。それからいろいろの検査法を施して、その子の心の發達の状態を調べてみますと、成る程、非常にその發達が悪くれてゐる。これでは、どんな親の慾目でみても普通の子供とはどうしても比べものにならないはずだといふことが判つたのであります。そこでいろいろその原因について調べて見ましたが、どうもこれといつて取上げる程の

原因が見當らない。そこで最後に、あなた方の御結婚は（他人同志の間柄ですか）と突つこんで参ります、とその若いお母さまは、急に面を伏せて「實はいけないといふことは、かね／＼聞いては居りましたけれど、いろ／＼の事情で、つひ止むを得ず、従兄妹同志の結婚をしてしまひました」とやつとの思ひで告白されました。そして、長女が亡くなつた時、若しやそのためではないかと心配したのですけれど、さうかうしてゐるうちに、この子が出来て、さて今度はどうやら育つやうだと安心したのも東の間で、發育が思はしくなく、足の立つのもおそれれば、言葉もなか／＼出ないといふやうなわけで、いよく従兄妹結婚のせいかも知れないと思つて、その後は子供を作らないやうにし、この子が六つになる今日まで、その次を作らなかつたといふことであります。

血のつながりのある者同志の結婚即ち血族結婚といふものが、かうも子供の生れつきについて、大きな影響を興へるものでありませうか。兎に角昔から、これを出来るだけ避けるやうにした方がいとされてゐることは、右のお母さまのお話から推しても、解ること

であります、これが今日の學問の上からどんなに見られてゐるでございませうか。

それについて、私の調べた材料の一端をお話するならば、私の取扱つた多数の教育相談者の中で、いろ／＼の條件が、はつきり判つてゐる、正確な材料五百五十三人分だけを選び出して、その中の血族結婚の例を拾ひ上げてみたところ、従兄妹結婚の両親から生れた子供の例が、約五百パーセントの二十七名、又従兄妹関係の両親を持つ子供が、約二パーセントの十名ありまして、前の従兄妹関係の場合二十七名について、私の考案した確實な精神検査法を施した結果、低能兒と判定されたものが三名で十一パーセント、天才兒と判定された者は一人もなく、その間の、劣等兒が四名で約十五パーセント、優秀兒が三名で十一パーセント、普通の下が七名で約三十パーセント、普通の上が五名で約十九パーセント、まん中の普通といふ程度の者も五名といふ割合が出て参りました。

即ちこの結果では、非常に悪い子供は出て來ますけれども、非常によい子供は一人も現れてゐないといふ事實が判るのであります。



しかし、低能兒とか、天才兒とかいふ兩極端ばかりでなしに、もう少しその程度をゆるめて、劣等兒以下と、優秀兒以上といふやうにまとめますと、劣等兒は七名で約二十五パーセント、優秀兒は三名で十一パーセントとなり、從兄妹結婚の夫婦の間に出來た子供の四分の一は、劣等兒、低能兒となり、優秀兒になる者は僅か十分の一餘りしかないといふことになります。

これをもう少し範圍を廣めて、普通の上以下と、普通の上以上と、普通との三段階に分けますと、普通以下が最も多く、十四名で約五十二パーセント、普通以上がその次で、八名の約三十パーセント、普通が最も少くて、五名で約十九パーセントといふことになり、從兄妹結婚の夫婦から生れる子供の半分以上は、普通以下の劣つた生れつきの子供であり、その三割は普通以上の優れた生れつきをもち、約二割だけが普通の生れつきをもつてゐるものであるといふことが示されたわけであります。

又從兄妹の方は十人だけしか例がありませんから、はつきりしたことはいはれません

れども、實際検査した結果の事實だけ述べますと、天才兒が一人で、低能兒は一人もなし、優秀兒はなしで、劣等が一人、普通上が四人で、普通下が一人、普通が三人といふ割合になつて居ります。

この結果で見ますと、又從兄妹の方は、比較的生れつきの良い者が多く、普通以上が五名で五十パーセント、普通が三名で三十パーセント、普通以下が二名で二十パーセントといふことになります。

かうして見ますと、又從兄妹關係といふものは、餘りその子の生れつきに對して、大きな關係をもたず、少なくとも、悪い結果をもたらすといふことは餘り現はれないやうでありますけれども、從兄妹關係の方は、その子の生れつきに對して相當の關係をもつてゐるやうに思はれます。殊に悪い結果をもたらすことの方が、ずるぶん多いものであるといふことが、右の検査結果からいはれるやうであります。

かやうな結果は、血族結婚でない他の子供の検査結果には見られないところで、他の子

供の結果は、普通一般の學校で検査した時と同じやうに、大體劣等兒と優秀兒との割合が、同じやうに出て居ります。してみると、血族結婚の場合に、かやうに劣等兒の方の割合が非常に多くなつたといふことは、血族結婚とその子の生れつきとの間に、何等かの關係があるに違ひないといふことを思はせるのに充分であると思はれます。

この點について、かやうな精神検査を施した結果から、論じてゐる、他の學者の研究は餘り發表されて居りませんから、はつきり解りかねますけれども、家系の調査その他から、大體の傾向を述べてゐる今までの學說によりますと、優秀な者同志の血族結婚ならば、かへつて良い子供を作るが、劣等な者同志の血族結婚は、一層悪い子供を作るものであるといはれて居ります。

言ひかへると、悪いものが出来るか、良いものが出来るか、とにかく、一方にかたよつたものが出来やすいといふことになるのであります。

このことは丁度私の右の精密な實驗の結果に、はつきり示されてゐるやうに思はれ

ます。即ち普通の場合ならば、普通の智能の者が一番多く現れるのが當り前であるのに、血族結婚に限つて、普通の智能の子供が一番少なく、僅か二割足らずしか現れてゐないがこれに反して、優秀兒と劣等兒の方が多く現はれてゐるといふことがそれでありませう。

しかし、右の研究結果でも示されてゐるやうに、どちらかといへば、悪い子供の方が多く生れ易いものであり、かつ又、昔からの永い間の經驗からいつても、それを避けた方がよいと言ひ傳へられて來てゐる以上、成るべく心配を將來に残さないといふ意味で、血族結婚は避けた方が無難であるやうに思はれます。

親の因果が子に報いる 兩親の生れつきが立派であり、その血統から見ても何等非のうちどころがないにもかゝらず、その子に劣等兒や低能兒の生れることが、しばしば起るものであつて、その時われ／＼診断者の最も注意するところは、その親の惡疾、なかんづく花柳病であります。親の不身持が、その子に報いられて、純眞無垢であるべき子供の肉體に、生れながらにして、恐しい微毒の病毒を植るつけられ、年とともにその心もからだ

も、その病毒のために胃^いされて、つひに生れもつかぬ低能児になつてしまふといふ悲惨な先天^{せんてん}微毒^{びどく}児童の實例を、私どもは、しばしば見せつけられます。

教育相談所に参ります子供らの中にも、時々低能児や白痴^{ばくち}を見うけることがありますので、それらの子供の親について、いろいろ聞きたくしてみますと、中には正直に答へる親もありすけれども、このことばかりは、前の血族結婚などは違つて、明かに我が身の不始末^{ふしまつ}であり、恥^{はぢ}でもありませんので、なか／＼正直に打ちあけてくれません。従つて相談記録の中から、この問題に對する統計を取るといふことは、困難^{こんなん}でありますから、直接^{ちやくせつ}子供の中から、この問題に對する統計を取るといふことは、困難^{こんなん}でありますから、直接^{ちやくせつ}子供のからだについて、微毒^{びどく}の有無を検定してみた結果から結論するのが、一番適切な方法であります。

かやうにして子供のからだについて直接調べた結果、恐るべき先天^{せんてん}微毒^{びどく}を発見し、親の因果^{いんぐわ}が子に報^{ひび}るといふことの、如何に悲惨^{ひさん}なものであるかを感じさせられた、いろいろの實例を、私どもは知つて居ります。

不良児の先天微毒 その一つの例として、或る感化院に收容^{しゆじやう}されてゐる不良少年・不良少女の検査の實例について述べることにいたします。不良児は一般に、賢さの生れつき即ち智能において劣るものであるといふことは、世界各國の學者の検査結果の一致^{いち}するところであります。この感化院に收容されてゐる不良児について、私の精神検査法を用ひて検査した結果、約八十パーセントの者が劣等児であるといふことを発見いたしました。

ところがたまたまこの感化院の不良児について、微毒^{びどく}の検定が行はれまして、その結果によると、百四十三人中、三十一人が、明かに生れながらの微毒^{びどく}即ち親から受けた先天^{せんてん}微毒^{びどく}をもつてゐるといふことが判明いたしました。しかも、それらの不幸な先天^{せんてん}微毒^{びどく}不良児は、ほとんど皆劣等児ばかりであつたのであります。

この感化院に現れた微毒^{びどく}児童の割合約二十二パーセントといふものは、他の感化院の收容児に比べて、まだ／＼少ない方ではありますが、これは、この感化院の入院の場合の事情が、他と違ふからでありまして、この感化院では、入院の際必ず心理的診断をして、その

結果によつて許否をきめることになつて居ります。こゝに示された不良児は、關門を通つた、子供でありますから、私の検査法で「最下智」といつてゐるところの、低能児の段階に入らないところの、劣等児といふ段階から上の者ばかりであります。

若しかやうな試験をせずに、低能児でも何でも入れるといふことであつたら、徴毒不良児の割合が、もつと／＼多くなることゝ思はれます。

低能児の三分の二は先天徴毒児 このことを裏書する第二の例が、低能児だけの實驗例で示されて居ります。名古屋市内の或る普通の小學校について、低能児だけ三十五人選び出して、それらに先天徴毒検定の方法を試みた、或る醫學博士の報告によりますと、その中の二十三人までが、明かに親ゆづりの先天徴毒をもつてゐるといふことが證明されたといふ事實がそれでありませう。

これで見ますと氣の毒な低能児の約三分の二といふものが、その親の不身持に禍されて次第々々にその心の働きが劣つて行くといふ、悲惨な事實を、われ／＼が今まで見のがして

て來てゐるのではないかと思はれます。

かやうな氣の毒な低能児や不良児を、どうしたならば救へるでありませう。それはたゞ早期發見と治療との二つの道に向つて、世の親と指導者とが自覺するより他の道がないのであります。

しからは、先天徴毒の有無を早く検定し、不幸にしてそれが報いられてゐることを認められた時、これを治療するならば、果して低能児が救はれるであらうか。この問題に關する精密な實驗が、ほとんど行はれて居らなかつたのであります。丁度幸にも、右の感化院でその徴毒兒童を、約一ヶ年にわたる六百六號の注射療法で、治療しようといふ試みが行はれましたので、治療前と治療後との、いろ／＼の精神能力を、精密に實驗して、先天徴毒治療の効果が、精神の發達に對して、どれだけ影響を及ぼすものかといふ、興味ある研究を行ふべき、絶好の機會を興へられました。

その研究結果をこゝに詳しくお話しすることは、餘りにくど／＼しくなりますので、その

結論だけを簡単に述べますと、治療をうけて、完全に徴毒の驅逐された子供は、そのいろ／＼の精神能力において、相等の回復を來すものであるといふことが證明されたのであります。

私のこの研究結果を、或る學會で發表いたしました時、非常に興味ある問題として、各方面の注意を引き、或る醫學博士も、私の研究結果の重要であることを認められました關係から、その後、方々の感化院で、この方面の治療と研究といふことが行はれるやうになつて参りましたが、私の望むところは、世の低能兒を持つ親が、若し我が身にかへりみてやましいところがあるならば、先づ我が子の先天徴毒の有無を、専門醫に頼んで檢定してもらひ、不幸にして、その反應が現れたならば、一日も早くこれを治療して、その子のあくれた精神の發達を取り返へすことに、最善の努力を捧げるといふ、罪滅しの精進をしていたゞきたいといふことであります。

今まで述べて参りましたやうに、劣つた心や、悪い病氣などが、親から子へと、遺されたり、傳へられたりして、あどけない幼な兒を、生れながらの低能兒や、白痴にしてしまふものであるといふことを知つたならば、われ／＼は、先づ我が身の心とからだを清淨無垢にして、ほんとうに立派な子供を生むにふさはしい、立派な親となるやうに、日夜心がけなければなりません。

生れつきの良い子を生むといふことは、家庭教育の効果を大ならしめる、最大の要件であります。

第三講 育ち上げる

一 氏より育ち

環境の力 どんなに生れつき立派であつても、それを野放しにしておいたならば、ほとんど野獸に等しいやうな、手におへない人間になつてしまふであります。これに反して、温い家庭で、正しい教育愛の下に育て上げられるならば、その立派な生れつきが、めきめきと發達して、ほんとうに立派な人間として成人するであります。また劣つた生れつきの子供でも、相當のところまで伸ばされるに違ひないのであります。

昔の人が「氏より育ち」といつて、家柄や、血統といふことよりも、どんなところに育て上げられて来たかといふことを見れば、その人の本當の値打が判るものだといふ意味も、こゝにあるのであります。即ち人間のよしあしは、その生れ落ちた子供を育て上げて

くれるところの、環境の力、或はまわりの力の如何によつて定められるものだといふことであります。

低能兒を作る恐しい病氣 心も、からだも、純眞無垢で生れ落ちた、玉のやうな愛兒も親の一寸した不注意から、生れもつかぬ低能兒にしてしまふといふ、恐るべき魔の手が、か弱い幼な兒のまわりを取りまいて居ります。

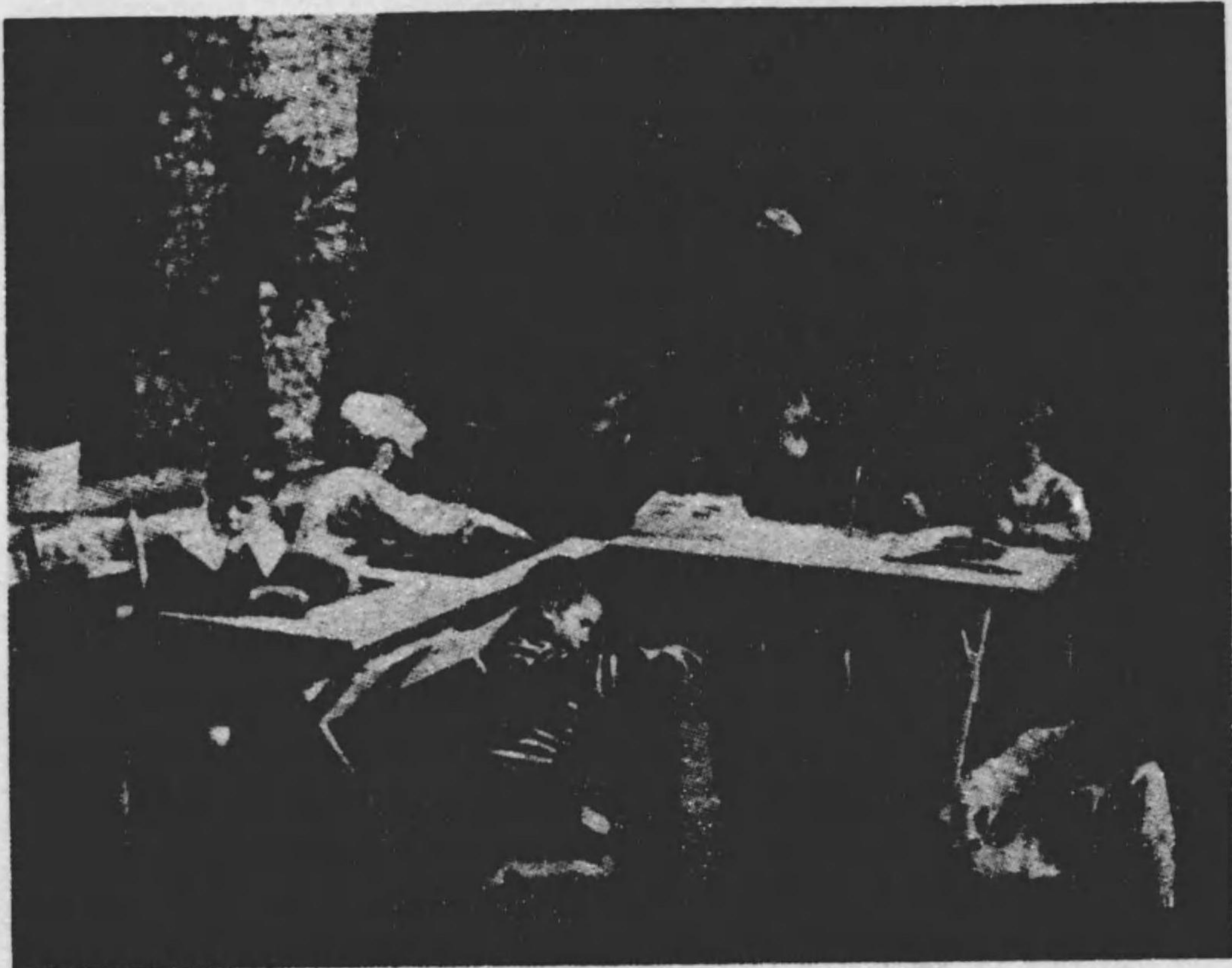
その中でも一番恐しいものは、腦膜炎といふ病氣であります。ぐわんせない乳のみ兒が無心にいちくり廻しながら、しやぶつてゐる母の乳房に、コチンと塗りたてられた、母親の襟脚の、安白粉の飛ばつちりが、ほんのりと、散りかゝつてゐる場面を、想像してごらん下さい。乳のみ兒は、何も知らずに、散りかゝつたその白粉を、お乳といつしよに吸ひ込んでしまひます。えてあり勝ちな、安白粉の中の鉛分が、乳兒の純潔な血潮を濁しながら、腦に流れ込んで行くことを、どうすることも出来ないであります。腦膜炎の炎症が、ひきつけ、さうなつたらもう手おくれであります。幸にして命はとりとめ得たにしまして

も、あはれその子は、生れもつかぬ低能兒となつてしまふのであります。

かうした悲惨な事實が、白粉の鉛毒といふことを知らない母親の多かつた時代には、すゝみん澤山現れたものであります。最近では一般に、白粉の鉛毒の恐しいことを知るやうになつた爲に、鉛の中毒から起る腦膜炎兒童の割合が、著しく減つて來てゐるやうであります。しかし、まだ全くなつたといふところまでは行つてゐないのでありますから乳兒をもつ親は充分注意する必要があります。

その他、食べ物の與へ方を誤つたために、ひどい胃腸の患ひを起し、それが、發育ざかりの幼兒期において、永い間續いたために、からだの發育が、ほとんど止まり、それと同時に、心の發達も、著しくおかれて、ほとんど低能兒に近い子供になつてしまつたといふ實例や、呼吸器の疾患が重くなつたために、からだの發育を害し、その結果、心の伸び方も著しくおくれたといふ實例など、からだの發育と心の發達との間の密接な關係を物語るところの、幾多の相談の實例を、私は取扱つて居りますが、これらは皆、その親なり、兄弟

積木遊び



(第一三〇頁参照)

なり、その他その子の周囲しうわいにゐる者が、もう少し氣をつけて育て、くれさへすれば、こんなみじめな結果にちとしいれなくとも済すむものと思はせられる問題ばかりであります。かうしてみると、生れつきも大切であるが、また、その生れつきを育はぐんで行くところの、生れてから後の、環境くわんきやうの力といふものが、如何に大切なものであるかといふことを、しみじみ感じさせられるのであります。一番そこなはれ易い、弱々しい子供の命の、苗床たぐきの時代をあづかる家庭教育が、如何いかに重大なものであるかといふこともまたこれによつて知られるであります。

三つ子の魂百まで 悪い病氣にかゝらせないやうにと、細心さいしんの注意を拂ふことはもとより大切なことでありますが、からだの病氣といふものは、どこの家庭でも、一般に、比較的用心して居りますから、手おくれになつてしまふといふやうなことは、さうしばしば起るものではありませんけれども、心の病氣といふものは、すぐそれと、外に現れて來ない場合が多いだけに、やゝもすれば幼な兒の心の中に蝕くんで行く、悪い習慣とか、性質と

かいふものを、うつかりして見のがし、そろ／＼親の言ふことをきかなくなる頃になつて、始めてそれと気がついて、後悔する親も、ずいぶんあることです。幼い時に、親や兄弟からうける心の影響といふことについては、特に細心の注意を拂ふことが必要であります。

我がまゝで、ずばらで、手に負へない不良少年を持つた母親が、或る日、相談所を訪ねて参りました。いろ／＼話を聞いてみると、その子の幼い時に、家庭の事情で、その子をお祖母さんの手許で育て、もらはなければならぬことになつたといふのであります。ところがそのお祖母さんは、初孫のことゝて、殊の外その子を可愛がり、我がまゝ、ずばらの仕放題にさして、その子の歡心を買つてゐたのであります。かういふ生活が四年程續いて、いよいよその母親の手許に歸つて來た時には、昔の幼な兒の時代の純な氣持はどこへやら、もう母親の云ふことなど、てんで耳にも入れない、變り果てた心の少年になつてゐたのであります。

昔から「三つ子の魂百まで」と申しますが、ほんとうに、幼な兒の時代の家庭教育といふことは、ゆるがせに出來ないものであるといふことを、われ／＼はかういふ實例からも、しみ／＼と感じさせられます。

二 孟母三遷の訓

友達を選べ どんなに生れつきの良い子供であつても、又どんなにその家庭内の教育が行届いてゐても、若しその子の周圍に、悪い友達が出來たならば、それこそ、「朱に交れば赤くなる」であつて、知らず／＼の間に、その友達の悪い感化をうけて、せつかくの家庭教育も、まるつきり臺なしにされてしまふといふことがないとも限りません。ほんとうに立派な子供を育て上げようとするならば、その子供を、知らず／＼の間に育て上げてくれるところの、友達の力といふことに對して、親は充分の注意を拂はなければなりません。友達の力は、勿論、悪いことにはばかり働くものではなく、寧ろ良い方面に働きかけるこ

とが、ずいぶん多いものであります。このことに關係して、いたづらに友達の悪感化といふ方面だけを考へて、我が子を友達から隔離してしまつたために、かへつてその子をそねたといふ、いはゆる「過ぎたるは及ばざるが如し」といふ母親の、相談の實例をあげるのも、無駄なことではないと信じます。

屋内に閉ぢこめられた一人兒 六つになる男の一人兒、どうも氣むづかしくて、亂暴で、おまけに言葉の發達が、よその子供よりも劣つてゐるやうですが、どういふわけでせうか、これを治すにはどうしたらいいでせうかといつて、相談を持込んだ、若い、教養のありさうなお母さんがありました。早速いろいろの精神検査を試してみましたところ、賢さの生れつきは、相當のところまで伸びてゐますけれども、その言葉の發達の方面は、ずいぶんおくれで居ります。それから、だん／＼その子の家庭生活の有様を聞きたゞして見ますと、そのお母さんは、さも心得顔に「近所の子供が皆悪い子供ばかりなものですから、その感化を恐れて、外へ遊びに出さないやうにしてゐます」とおつしやるのであります。

このお母さんの教育方針は、果して立派なものでありませうか。假りに大人がかやうな境遇におかれたとして御覽なさい。さうしよつちゆう家の中にはかり閉ぢこめられたとしたら、大概の大人でも參つてしまひます。きつとクサク／＼して來るに違ひありません。まして、遊び盛りの男の兒、遊ぶことによつて、そのからだも、心も、すく／＼と伸びるやうに運命づけられてゐる幼な兒が、朝から晩まで、家の中に閉ぢこめられてゐたら、一體どうしてそのからだの中に湧き起る生命の力なり、エネルギーなりを發散させればよいのでせうか。全く勢力のはけ場がなくなるではありませんか。

されば閉ぢこめられた子供は、自らその勢力のはけ口を作らなければならなくなるのであります。わめいたり、泣いたり、手足をもがいたり、人を打つたり、物を投げつけたり、いろいろの運動を、家の中でやり始めます。それを大人は亂暴と名づけるのであります。しかし子供から見れば、さうせずに居られないから、するだけであつて、決して亂暴しようとか、意地悪しようとか考へてやつてゐるのではなく、さうすることによつて、他の子供

等が、戶外で思ふ存分駆け廻りながら、滴當にエネルギーを放散させる時に感ずるところの一種の快さと同じやうな快感を、その子供が感じ得るからであります。

この見易い理窟を、うまく利用して、氣違のやうな亂暴者を、見ん事治療した、私の教育治療の實例を、第九講の二「怒りつばい子供の原因と矯正法」といふところに詳しく述べてありますから、それと照し合せて、このお母さんの持ちこんだ、一人兒の亂暴が、どうして起つたか、そしてそれをどうして治したらいかといふことをお考になるならばこの問題は直ちに解決されるものであります。

次に、この一人兒の言葉の發達のちよいといふことも、その原因の大部分は、この母の家庭教育の方針から來たものでありまして、私が澤山の幼兒について研究した結果から見ましても、一人兒とか、友達のない子供とかは、一般に言葉の發達がちよいものであるといふことが示されて居ります。況んやこの子供のやうに、一人兒であつて、おまけに友達が與へられないとすれば、このやうな結果になることは寧ろ當然のことでありませう。

元來、言葉といふものは、社會的なものでありますから、多くの人々と交はつて、しばしばその必要に迫られてこれを使へばますます發達して行くものであり、しかもその話相手手が、自分より少しく進んでゐるものであれば、その相手の言葉を早く真似やすいものであるといふ性質のものでありますから、子供が、大人の側に居て、すでに完成された大人の言葉を真似るよりも、同じ年頃の子供等の間に交つて、その中の少し進んでゐる子供の言葉を真似て覺える方が、遙かに覺え易いものであります。

しかるに、このお母さんは、この理窟が解らず、たゞ悪い友達から受ける悪感化を恐れるといふ一念だけからして、子供の言葉の自然の伸び方を導いてくれるところの先生ともいふべき、同じ年頃の友達を、わざ／＼その子から遠ざけてしまつて、そしてこの子は言葉の發達がおそいといつてこぼしてゐるのであります。

孟子の母 かやうに子供らは、友達と遊ぶといふことによつて、いろ／＼の利益を受けるものでありますから、出来るだけ友達を選んでやるといふことが必要であります。然

しその悪い感化といふことも無視することが出来ませんから、適當な友達を選ぶといふことが、家庭教育上極めて重要な事柄であります。

良い友達を選ぶといふことは、やがて、よい環境を選ぶといふことにもなるものであります。この點について思ひ出されることは、支那の聖人とうたはれた、孟子といふ人のお母さんの苦心であります。

孟子の幼い頃、その家が初め、お寺の近所にあつた時、「門前の小僧習はぬ經を讀む」といふ例にもれず、孟子は毎日のやうに、近所の子供らと、葬式ごつこばかりして遊んで居つたのであります。これを見た孟子のお母さんは、こんなことをさしておいては、子供の將來のためにならないといふことに気がついて、それから街の方へ引越すことにしました。ところが今度は、近所の店屋の子供らと一しよになつて、孟子は毎日のやうに、商賣ごつこに熱中するやうになつた。そこで孟子のお母さんは、こゝも思はしくないと見てとつて、最後に引越して行つた先は、學者町ともいふべき、靜かな住宅地でありました。こゝへ移

ると、今度は、近所の子供等といつしよに、本を讀むとか、字を書くとか、お話をして聞かせるとかいふやうな、學校ごつこに夢中になるやうになりましたので、孟子のお母さんも、これならばさつと、孟子の將來のためによい影響を興へてくれるに違ひないと信じて安心してこゝに落ちつくやうになつたといふことであります。孟子の母がその子の教育のために、三度その住居を選したといふので、昔からこれを、孟母三遷の訓といつて有名な話になつて居ります。

社會の力 家庭教育をほんとうに立派になしとげようと思へば、かやうに、友達のとこにひそむ社會の力といふことに對しても、常に考をめぐらしておかなければなりません。奢侈贅澤な都會に住むと、子供等は何時の間にか贅澤に流れ、ついには青い灯紅い灯に誘はれて、カフェー廻りをするといふやうなこともなつて参ります。

これに反して、質實剛健の氣風みなぎつた、質朴な田舎に住まへば、子供等は自然とさ

ういふ氣風に染まつて行きます。

善いにつけ、悪いにつけ、子供の心の發達に及ぼす社會の影響といふものは、非常に大きいものでありますから、親は常に、その子の生活してゐる社會といふものゝ動きとか、氣風とかいふものに對して、深い注意を拂ひ、それらの變化氣風に對する子供の心の準備といふものを、豫め練り鍛へておいて、それこそ「轉ばぬ先の杖」をつかせるやうに心がけなければなりません。

かくて、その生れつさを優良にし、その育ちを善美ならしめることによつて、始めて、ほんとうに強く、賢く、朗らかな子供を育て上げることが出来るものであるといふ確信の下に、正しい教育愛をもつて、家庭教育の重任に當るならば、必ずやその子の將來に、輝かしい幸福がもたらされるであります。

この心の準備をもつて、われわれは、いよいよ児童の心理とその導き方に関する、詳細な研究を續けて行かなければなりません。

上 篇 乳幼児の心理と家庭教育

第 四 講 乳兒の心理と家庭教育

一 心の芽生え

混沌たる心 オギアといつて生れ出た、赤ちやんの心は、丁度、この世の始まりが、陸もなく、海もなく、たゞドロ／＼とした火の塊であつたやうに、考へることも、喜ぶことも決心することもなく、たゞ混沌たる生命の塊として動いてゐるに過ぎないものであるといつてもいいでせう。

その後、月日のたつにつれて、その混沌たる生命の中から、見ること、遊ぶこと、考へることといつたやうな、今まではつきり現れてゐなかつたところの、いろいろの心の働きが、次から次へと現はれて來るものであります。この移り變りは、又、ドロ／＼した火

の玉が、月日のたつにつれて、だん／＼冷え固まり、今まで見えなかつた、海や、陸や、山や、川などが、次から次へと現れて来るといふ、この世の移り變りにたとへることが出来ます。

忽ちにして靈峰富士が現れ出で、この世の姿を見違へる程麗しくしてくれたやうに、昨日まで現れなかつた、驚くばかりの智慧が、突如として乳兒の心の中に現はれ出で、周りの人々をびつくりさせることも、しば／＼起るものであります。

しかし、富士山が、突如としてこの世の中に飛び出すためには、眼に見えない、地下の物凄い力の變化が、日に月に行はれてゐたことを、忘れることが出来ないと同じやうに、乳兒の賢さの突然の變化には、やはり、その時まで、時々刻々に變りつゝあつた、眼に見えない、心の奥底の尊い力が、働いてゐたといふことを忘れることが出来ないのであります。

かやうな混沌たる心の最初の姿は、どんな形で現れるでせうか。そして月日のたつと、

もに、それがどんな風に變つて行くでせうか。それは、本能・情緒・感覺・智慧などの働きとなつて、簡單から複雑へと、次第々に變化して行く姿として、認められるだけであります。

本能・情緒 生れ落ちた赤ちやんは、生さんとする力を先づ第一に現します。動物や人間は、その與へられた生命を保ち續けて行くために必要な、いろ／＼の働きのするところの、根強い力を、生れながらにして與へられて居ります。生れたばかりの赤ちやんの口の周りに、何かをふれてみると、すぐにその物に吸ひつかうとします。これは、誰からも教へられないところの、赤ちやんの生れながらにしてもつてゐる生命の働きであり、最も早く現れる心の姿であります。乳房を口に當てると、赤ちやんは、直にそれをくわへて、上手に乳を吸ひこみます。かやうな働きは皆、生さんとする生命の働きであり、生れながらの心の姿でありまして、これを名づけて本能と申します。

生命を保つて行くためには、たゞ飲んだり、食べたりして、命を續けるだけでは、まだ

充分とはいはれません。その大事な命を危くするものがあつたならば、それを避ける働きも必要であります。こゝに怖いものを恐れるといふ働きが出て参ります。たゞ恐れるといふばかりではなしに、自分の命に危害を加へようとするものが現れた時、それに向つて、飛びかゝらうとするところの、怒りの心も現れて参ります。

更に進んでは、自分の命を愛護してくれるところの、母とか、父とかいふ親しい人々の側に居ることを喜ぶところの愛情といふ心も現れて参ります。

かやうな恐れ、怒り、愛といふやうな心の働きは、これを内部の働きとしてみるときは情緒とよばれますけれども、若しかやうな内部の働きが、外側に現れて来て、逃げるとか、飛びかゝるとか、抱きつくとかいふやうな動作とか、行動といふものになつて現れる時は、これを本能と名づけるのであります。

たゞ生命を持ち續けたり、守つたりするだけでなしに、更に立派な生命に伸ばして行かうとする目的が、赤ちゃんの心の中に、自然に恵まれて居りまして、母親や父親の言葉を

真似たり、兄弟の遊びを真似たりして、いろいろの事柄を、最も経済的に、かつ早く學ぶといふ、いはゆるものまねの心、或は模倣本能といふ働きが現れて参ります。

その他、見る、聞くなどの感覚の働きは、すでに早くから現はれ、綺麗な玩具を見ては喜び、ガラ／＼玩具の音をきいてはほ／＼と喜ぶといふ感情の働きも現れ、やがて、その玩具を自分でいちくり廻しては遊び戯れるといふ、遊戯といふ働きも現れて、乳兒の心の働きは、次第々々に複雑多様になつて参ります。

かやうに、混沌たる状態から、いろいろの方面の働きが、次第に頭をもたげ出して來るといふことは、非常な勢で發達して行くところの、乳兒の心の芽生えの激潮たる勢を物語るものであつて、やがて大きな枝を出し、葉を擴げ、そして花を開き、實を結ぶところの立派な一人前の心の働きに伸び行くための、大事な根を下ろしてゐる姿なのであります。

立派な花を開き、實を結ばせようと思へば、先づその双葉の芽生えの時から、これを大切にいたはらなければなりません。では、乳兒の心の芽生えを、如何に取扱ふのが、最も

合理的であり、又教育的であるのか。この問題について、少しく述べて見ませう。

二 乳児の教育的な取扱ひ方

愛らしい赤ちゃん 丈夫で、伶俐で、可愛らしい子、それは何處の親でも望むところ、殊に赤ん坊は、赤ん坊らしく、にこやかで、愛くるしいことが、何よりも望ましいことでもあります。赤ちゃんは、どうしたら、機嫌よく、にこ／＼してゐてくれるでせう。

オギャアといつて生れ落ちるその瞬間から、赤ん坊は、機嫌悪さうな、しかめ面をして、よく泣き叫びます。それこそニコリともいたしません。赤ん坊つて笑はないものかしらと思つてゐると、二ヶ月程もたつた頃から、「わーい！ パア！」など、あやされると、ほゝ笑み始めます。軽いたゞいてやつても笑ひます。

三ヶ月位たつと、強く、弱く、高く、低くといつたやうな、リズムのある手拍子なり、宙の音なりを聞かしてやつても、ニコ／＼します。四ヶ月頃からは、風車のやうな、色ど

りの鮮かな、綺麗な玩具を眺めてはほゝ笑み、五六ヶ月頃からは、掴んだり、振つたり、たゞいたりすることの出来る、ガラ／＼玩具とか、太鼓とかをもてあそんでは喜ぶやうになり、日一日と愛くるしくなつて行きます。

かやうに、あやしてやるとか、皮膚や、耳や、目などの感覚器官を、適當に刺戟してやるとか、玩具をもつて遊び戯れたいといふ本能の要求を適度に満足させてやるといふやうなことは、何れも、赤ん坊の心を、氣持よくして上げる、大切な方法でありますから、常に明るい氣分と、にこやかな、愛くるしい面持をもたせようと思へば、親は、かやうな方法をよくのみこんでおいて、機にふれ、時に臨んで、適度にこれを活用するやうに心がけなければなりません。

適當な刺戟を與へるといふことについて、誰でもすぐ氣のつくことは、赤ん坊をお風呂に入れる時の湯加減の問題であります。赤ん坊の取扱ひについて無頓着な母親などは、うづかりして赤ん坊を、熱すぎるお湯に入れて泣かしてしまふことがあります。これは勿論

そのお湯が、赤ん坊の皮膚の感覚に對して強すぎる刺戟となつたからであります。一度かういふ經驗をさせると、その次から、その赤ん坊が、熱い熱くないにかゝはらず、お風呂を見さへすれば泣出すといふ、始末にあへない習慣をつけてしまふことがあります。

この時、多少でも子供の心理といふことについて學んだことのあるお母さんであれば、たとへ、子供の取扱は始めての方であつても、すぐ子供の皮膚の感覚と刺戟との關係を思ひ出して、同じ刺戟が永い間續いて與へられると、その刺戟を受けてゐる感覚が、次第にその刺戟に馴れて行つて、餘り感じなくなるものであるといふ理窟を應用し、先づ、ぬるお湯で、子供の皮膚を何遍かひたしながら、熱さを感じる皮膚の感覚を、その湯の熱といふ刺戟に馴れさせて、それからいよ／＼お風呂の中に入れるといふ順序をとることとせう。さうすると赤ちゃんは、少しもお風呂をいやがらず、ニコ／＼しながらそれにひたるといふことになるのであります。

臆病な子 子供が、雷鳴を聞いてふるへ上るとか、犬を見て怖がるといふ恐怖の心は、

何かしらその生命をおびやかすところの危険なものに對して、用心するといふ意味で、生命を伸ばして行くのに、極めて大事な本能の働きであります。しかし、少しも恐れるに足らないことを、むやみに怖がるといふ、臆病な子供にしてしまつては、その子の將來の發達のために、面白くない結果をもたらすものでありますから、親は、この點によく注意して、臆病な子供はどうして出来るか、そんな子を作らないやうにするためには、赤ちゃんの時代から、どんな點に氣をつけたらいいかといふやうなことがらについて、充分研究しておく必要があります。

子供はいろ／＼のものを怖がりますけれども、それらのものの中には、どんな子供でも必ず怖がるといふ、生れつき怖がるやうに定められてゐるものと、或る子供は怖がるけれども、他の子供は怖がらないといつたやうに、その子供々々によつて違ふもの、言ひかへれば、生れてから後につけ加へられたものとの、二つの種類があるものであります。その中生れながらにして、どの子供でも必ず怖がる原因になるものは何であるかといふ點に

ついで、近頃詳しい實驗的研究が、多數の赤ちやんについて試みられるやうになりましたが、それらの詳しい説明は、第九講の「幼兒の情緒と本能」といふところで申し上げますから、こゝでは極く簡単に、その結論だけを、かいつまんでお話いたしますと、要するに、強い大きな音を聞かされるといふこと、からだの支へを失つて、ひつくりかへりさうになるといふこと、の二つだけは、どんな子供でも、必ず生れつき怖がるこの原因であるといふのであります。

そこで、怖がりやの、ビク／＼ツ子を作らないやうにしようと思へば、出来るだけ、さういふ原因を與へないやうに、赤ちやん時代から、毎日の生活に氣をつけてやるといふことが、當然必要になつて参ります。

さて、こうして毎日の生活について考へてみますと、私共は知らず／＼の間に、赤ちやんを、びつくりさせるやうな、大きな音を、ずぶん不用意に出してゐることに氣がつくであります。あわて、駈けこんで来た上の子が、赤ちやんの寝てゐる部屋の襖を、ガタビ

ンヤンと開けたてする。赤ちやんは、ビクツと飛び上る。甚だしい時には、ワツといつて泣き出す。女中がうつかり手を放して閉め送つた應接間のドアが、ガタンといふ大きな響を立て、家中をゆるがす。赤ちやんはびつくりして眼を醒ます。その他、父親が大きな聲で子供を怒鳴りつける、母親が金切聲で女中を叱り飛ばす。番犬が夜の静けさを破つて物凄く吠え立てる。かうした荒々しい、大きな物音が、だしぬけに襲つて来ては、平和な赤ちやんの心をかき亂し、これを恐れしめるといふことが、果して毎日の家庭生活に起つて来てはゐないか。われ／＼は深く、自らに、反省してみなければなりません。

赤ん坊が、如何に物音に怖るものであるかといふことは、少しく兒童心理の書物を讀いてみた人の、誰でも感ずるところであります。生後四ヶ月の男の兒が、父親の軒の音をきいて、非常に怖がつて泣出したといふ例、十ヶ月の男の兒が、大きなクシヤミの音を聞いてペンをかき、隣りの家で大聲で唱歌を歌ふのを聞いて怖がつたといふ例などは、子供の怖がる心と大きな音との間に、如何に密接な關係があるかを思はせるのに、最もふさは

しい實例であります。

文明が進めば進み程、子供の心をかき亂し、これを怖がらせるやうな物音が多くなつて参ります。ブル／＼と大きな音を響かせて、飛行機が頭上をかすめ去る時、幼な兒が、フーツと泣聲上げて母親にしがみつくことをわれ／＼はしば／＼目撃いたします。汽車がポーツといつても、自動車がブーツといつても、電車がガーツといつても、赤ちやは、幼な兒は、きつと怖がります。

文明の利器に喧しい音がつきものである以上、これをどうすることも出来ません。都會の子供が、ロ一日と落つきがなくなり、オド／＼した心の生活におびえなければならなくなつて行くといふことは、ほんとうに嘆かましいことでもあります。せめて家庭の中だけでも、もつと／＼静かな生活の中に、赤ちやんと安心して過ごさせるやうに、そしてどんな赤ちやんでも必ず恐れるところの大きな音を、努めて避けるやうに、これが世の親に望むわれ／＼の大きな願ひであります。さうすることによつて、平和な、朗らかな赤ちやんが

作り上げられて行くのであります。

怒りつばい子 怒るといふ心の働きも、生れつきのものと、生れてから後に植ゑつけられたものとの二つに分けることが出来ます。頭を抑へつけるとか、手足を縛るとか、その他なんでもからだの自由のさかないやうなことをすると、どんな赤ちやんでも必ず怒るものであります。これは生れながらの原因によつたもので、この抑へつけられるとか、自由を奪はれるとかいふことは、後になると、からだの自由ばかりでなく、心の自由とか慾望とかを抑へつけられる時でも亦同じやうに怒りを起すところの原因となるものであります。

このことを親が、よく心得ておきさへすれば、子供を怒らせなくともすむやうな場合がいくらかもあるものであり、従つてまた、しば／＼怒り散らすところの、怒りつばい子供を作らずにすむといふことにもなるのでありますから、家庭教育にたゞさはる人々は、この點をよく了解して、いたづらに、子供の運動や、自由を束縛しすぎないやうに注意するこ

とが極めて大切であります。

例へば着物を着せたり、脱がせたりする時などでも、手が袖につかへて思ふやうに出て來なかつたり、紐を結んだり、ボタンをはめたりする時に、何時迄もく子供の中から抑へつけてゐたりなどして、子供の運動の自由を妨げるために、子供がイラ／＼したり、ブツ／＼云つたり、いやがつて泣いたりするやうなことをしば／＼繰返されると、その子は、何時とはなしに怒りつばい性質を植ゑつけられてしまふことにもなります。でありますから、母親は勿論でありますけれども、女中とか、乳母とか、其の他赤ちやんを取扱ふところの人々に對しては、成るべく手際よく、素早く着物の脱ぎ着せをさせるやうな練習をつましておくことが、最も望ましいことであります。

その他、赤ちやんが、ガラ／＼を持つて、喜んで遊んでゐるところへ、年上の子供がやつて來て、その玩具を奪ひ取るやうなことでもあると、赤ちやんは、自分の欲しいといふ要求を妨げられたのでありますから、忽ち怒り出して泣き叫びます。こんなことをしばし

ば繰返されようものなら、その赤ちやんは、何時の間にか怒りつばい、氣短かな子供になつて行くであります。こんなことの起らないやうに、常日頃上の子供の心をよく導いておくといふことも亦、赤ちやんを明るく朗らかに育て、行くために、極めて必要なことでもあります。

赤ちやん時代を通り越した、幼児の時代の、怒りつばい子供の心理と、その取扱ひ方については、後の第九講「幼児の情緒と本能」といふところで、詳しく考へて見ませう。

第五講 幼児の言葉

一 幼児の言葉の発達順序

乳兒から幼児へ 赤ちやんの間、即ち乳兒時代は、その心の働きの、極めて單純で、いはばほんの芽を出したばかりのところといつてもよい程でありますから、その智慧の働きのやうなものでも、まだ動物の心の働き位しか現れてゐないといふ時期であります。

ところが、誕生日を迎へる頃から、乳兒のからだや心の中に、いろいろの大きな變化が起つて參ります。先づお乳を飲まなくともよくなる。それよりもつと大きな變化は、誕生日後三ヶ月位までの間に、多くの子供らが、立つて歩き出すといふことが始まり、更に二ヶ月位すぎると、言葉を使ひ始めるやうになるといふことであります。この歩き始めること、言葉を使ひ始めること、の二大變化を境目として、子供らは、乳兒期から幼兒期へと移り變るものであり、動物のやうな生活から、人間らしい生活へと進化するものであります。

ります。

かやうに、歩き始めるといふ出來事は、その子供の心やからだの發達の有様を知るのに、極めて大切な役目をするものであり、殊に將來その子が賢い子供になるのか、それとも愚かな子供になるのかといふことを、豫め判断する際の、一つの重要な材料ともなるのでありますから、親は、その子の歩き始めた時期を、必ず記録して、後々まで残しておくやうにしなければなりません。

普通の發達を示してゐる子供でありますと、男兒ならば、生後十五ヶ月、女兒ならば一ヶ月早く、生後十四ヶ月で歩き始めるといふのが、最も多く、こゝらが大體の標準となつて居ります。従つてお誕生前に歩き出したとか、もう八ヶ月位で足がついたなどいふ、すばらしく早い子供は、それだけ、心やからだの發達が早いのでありますから、誠に結構なことでありますが、これに反して、二誕生すぎてもまだ足がつかないなんていふ子供は、特別の病氣をした者は別ですけれども、さもないければ、こんなに歩き始めるのがおそいと



いふことは、どこかに缺陷のあるものと見なければなりません。殊に三ヶ年たつてもまだ歩めないといふやうな子供は、多くの場合、低能児か白痴であるとして見てよろしいものであります。

周囲の者に、どういふことを云つてゐるかがよく讀みとれるやうな言葉、即ち片言といふものを使ひ始める時期も、子供によつて、まち／＼であるけれども、普通の生れつきを持つた子供であると、大體歩き始めよりも二ヶ月位おくれたところの、男児ならば、生後十七ヶ月前後、女児ならば十六ヶ月前後といふところが、標準でありますから、歩き始めの場合と同じやうに、その片言始めの時期を、我が子の大事な歴史の一頁として、必ず書き残しておくやうにしていたきたいものであります。

片言の場合でも、歩き始めの場合と同じやうに、餘りおくれるといふことは、心の發達に、何等かの缺陷のあることを示すものでありますから、さういふ子供を持つた親は、早くから用心して、特別の指導方法を、出来るだけ早期に施すやうに、準備しなければなりません。

ません。

かやうにして、歩く、話すといふ二大變化を境として、それから後の幼時の心は、非常な勢で進歩發達して行くのであります。そのうちでも、特に家庭教育上大切だと思はれる、幼兒の心の働きの、主なる方面について、これから、その大事な見方と導き方とを、詳しくお話するのであります。先づその中の、言葉に現れた、幼時の心の特色について、次に詳しく述べることにいたします。

言葉の準備時代 幼時が生後十六ヶ月頃から、片言を言ひ始めるといひましても、その時突然出て来るものではなく、それまでに、乳兒時代から、絶えず、そのための準備をしてゐるものであります。

最初は、何といふ意味もなしに、たゞ「バババ」「マママ」と口を動かしては、獨りで發音の練習をやつてゐます。

それから今度は、母親とか、父親とか「バババ」「マママ」など、發音して聞かせると、

それを所似てやるやうになります。單に一つ一つの發音を真似るだけでなしに、幾つか積いた音の、高い低いなどの、抑揚とか、リズムといふものまでも真似るやうになり、母親が「バーア」といふ時に、最後の「ア」を引張つて、高く上げたりすると、乳兒もその通り真似ます。かうして言葉の抑揚をだん／＼覚えて行くのであります。

最後に、自分ではまだ思ふことを言ひ表せないけれども、他の人の言ふ言葉を理解するやうになります。「坊やお手々はどれ！」といつて尋ねると「ウ」といつて紅葉のやうな手々を差出すといふ時代がそれでありました。

片言葉時代 この準備の時代を通り越すと、今後はいよいよ自分の言葉で、自分の心を言ひ表すといふ時代がやつて参ります。いはゆる片言葉時代といふのがそれでありました。食べ物を見た時とか、それを欲しい時とかには、何時でも、さまつて「ウマ、ウマ」といふ言葉を用ひ、水や湯を見た時とか、飲みたい時とかには、何時でも「プ・プ」といふ言葉を用ひるといふやうに、子供の發音する言葉と、その意味するものが、何時でもちやん

と結びついてゐて、その言葉を聞いた者にも、すぐそれと讀みとれるといふ時代がそれでありました。これで幼時も始めて人間らしくなつたわけでありました。

この時代の幼兒にとつては、ウマ・ウマとか、プ・プとか、ババ(父)さかいふやうな唇を使って發音する言葉が一番使ひ易く、モーモー(牛)、べべ(着物)、ブーブー(自動車)、ポッポ(鳩)などいふ言葉が、この頃の幼兒に好んで用ひられるのはそのためであります。ワンワン(犬)などもこれに近いので、よく使はれます。

それから、トト(鳥)、テテ(手)、タッタ(立つ)、トーチャン(父さん)、チュンチュ(雀)といふやうな、舌の方を使って發音する言葉、ニーチャン(兄さん)、ネーチャン(姉さん)といふやうな、舌の先と鼻にかゝる發音の言葉が、だん／＼現れて参ります。

ところが、シンブン(新聞)が出来なくてチンブンと言つたり、カーチャン(母さん)が出来なくてチャーチャンと言つたり、ハナ(鼻)が出来なくてナナと言つたりするやうに、だん／＼口の奥の方で發音するやうな言葉になると、一層六ヶしくなるので、幼兒は、

それらの発音をみな表し易いものに變へて發音してしまひます。この發音の發達のことについて、後でまた、私の實驗した例をあげて詳しくお話しいたします。

この片言葉時代の幼児の言葉は、たゞ一つの言葉で、大人の使ふ長いお話なり文章なりに代用させてゐるものであるといふ點で、大きな特色をもつものであります。「ワン・ワン」といふ片言は、「犬がある」といふ文章にもなれば、「犬が怖い」といふ文章にもなり、又「犬の側へ行きたい」といふ意味にも使はれます。一語で文章を表すといふので、かやうな片言の時代を、一語文時代ともいひます。その「ワン・ワン」が、どういふ文章を意味するかは、その時の幼児の、言葉の抑揚なり、表情なり、動作なりから、察するより仕方がありません。

この時代の幼時には、「ある」とか、「行く」とか、「怖い」とかいふやうな、六ヶしい言葉はまだ現れて居らず、たゞ、犬を見た時に心の中に起つた、漠然とした心の姿とか觀念とかいふものと、それにつきまとも氣持とが、混沌たる一つのかたまりとなつて、「ワン・ワ

ン」といふ使ひ馴れた言葉の形で、口をついて飛び出したにすぎないのであります。

かやうな言葉を通して、うかいはれるやうに、幼児の心といふものは、漠然とした、混沌たる状態から、次第々々に、いろ／＼の心の働きに分れ／＼と、日一日と複雑になつて行くものであります。

單文時代 片言時代が半年位續くと、今度は、片言と片言とを、二つなり三つなり結びつけて、簡単な文章を綴る時代がやつて参ります。

發達の早い子供になると、十四ヶ月位で、二つの言葉を續けて使ふといふことも現れますが、普通は、一年六ヶ月から二年までの間に、最も多く現れます。私の長男は、丁度滿一年九ヶ月の時、私の膝に抱かれながら、私の胸のところに見えてゐるシャツのボタンを指さして「トーチャン・ボタン」と、始めて二つの言葉を結びつけて話しました。その時すぐに、「トーチャン・ノ・ボタン」といつて、特に「ノ」に力を入れて、ゆつくりと一度だけ言つて聞かせましたところ、すぐ真似をして、「トーチャン」といつてしばらく間をお

いてから、「ノ」といひ、又しばらく間をおいて、「ボタン」とつけました。「うま〜」と褒めてやつたら、すぐ又、「トーチャン」「ノ」「ボタン」と少しづつ間をおいて、言ひ続けることが出来ました。

その翌日、「お父さんのオベベはどこでせう？」と尋ねたところ、あつちこつちと、部屋から部屋へ探し廻つて居りましたが、結局、見つからなかつたので、引上げて来て、しばらく考へるやうな様子を見せてゐましたが、突然、「トーチャン・ノ・ベベ・チンチンゴ〜・ノ・ノ・ハイチヨハイチヨ」とすら〜と言つてのけました。「お父さんの着物が、電車に乗つて、さよならして行つてしまつた」といふのであります。これで「ノ」の使ひ方が、昨夜一度聞いたゞけで、ちやんと會得されてゐることが判りますとともに、もうすでに、充分、單文を使へる時期に入つてゐることも判るのであります。

この時代の幼兒は、非常な勢をもつて、言葉を習得し、かつこれを應用しようとするものであります。この事があつてから丁度一ヶ月後、長男が満一才十ヶ月の時のこと、知人

が長男にお土産にといつて、男の子が豚に乗つてゐるセルロイド製の玩具を買つて来てくれました。それを朝の食卓の上に持出して來まして、さも嬉しさに、いぢり廻して居りましたが、突然、誰にいふといふこともなしに、「ニーチャン・ワ・ブータ・ノンノ」と言ひ出しました。「ワ」といふ助詞は、私も母親も、未だかつて教へたことのない言葉でありますから、多分誰か使ふのを聞いて居つて、何時の間にか覚えてしまつたものと思はれます。

助詞即ちヲニヲハを使ひ始めるのには、少し早すぎると思ひましたけれども、誰も教へないのに、自然に、何時とはなしに聞き覚えて、突然それを使ひ出したといふことは、すでにその子の心の發達が、そこまで進んで來てゐるものと思はれましたので、果して助詞を使ひ分けられるかどうかを試すつもりで、試みに私が「ニーチャン・ワ・ブタ・ニ・ノメノシテキル」といつて、特に「ワ」と「ニ」とに力を入れて、ゆつくりと一度だけいつて聞かせましたら、すぐに真似をして「ニーチャン・ワ・ブータ」といふところまで云

つて、しばらく息をこらして考へてゐたが、「ニ」と力強く言ひ放ち、すぐその後から「ンノ」と續けて、助詞だけは完全に使ふことが出来ました。

それから、卓上の茶碗を指さして、「お茶碗ワ・何に・ノンノしてゐますか？」と尋ねましたら「チャワン・ワ・ペーブ・ニ・ノンノ」といつて、立派に應用いたしました。チープルといふ言葉は、チとルといふ六ヶしい發音を含んで居りますため、子供は自分に都合のよいやうに、ペーブとして發音したのであります。

その日の午後、母の側で繪本を見てゐた長男が、突然「テテワ・ブーブーニ・ノンノ」と獨言をいつたかと思ふと、すぐ「ペロ〜〜〜」と舌を唇に當て、解らないことを云ひましたので、母がその繪本をのぞいて見ると、子供が金盞の水に手を入れてゐる繪でありました。多分、その子供の手が水の上に乗つてゐると觀察して、早速今朝覺えた、助詞の「ニ」の使ひ方を應用して、「テテワ・ブーブーニ・ノンノ」といつてみたけれども、何となくすつきりしないので、さては「ペロ〜〜〜」といつて、自分の云つたことを自分

で打消してしまつたものと思はれます。「ペロ〜〜〜」はこれまで、解らない時とか、答へられない時などに、しばしば用ひられたところの「駄目々々」といつたやうな意味の、被獨得の言ひ表し方であります。

この時代の幼児の言葉は、文章といひましても、かやうに、極めて單純なものであります。そして、その言葉の種類なども、多くは、物の名前を表す名詞の範圍を出ないもので、それに、乗るとか、歩くといふやうな、動作を表す動詞とか、ベッカ (汚い)、チエチエ (きれい) などの形容詞などが、多少加はる位のものであります。

しかし、此の時期は次から次へと、新しい言葉を覺えて行く働が、非常に盛んな時期でありまして、ずるぶん澤山の言葉を知つてゐるものであります。ドイツの或る児童心理學者が、満二才の女兒について研究した報告によりますと、平均三百位の言葉をもつてゐるといふことであり、我が國の或る學者の統計では、満二才で平均五百の言葉をもつてゐるといふことであります。

複文時代 單文時代を半年位續けると、やがて二つ以上の單文を結びつけて、複雑な文章の言葉を使ふやうになります。私の長男は、満一歳十ヶ月半の時、「ナナ・パッチ・ナナ・ナン・カミ・トーチ・チョーヂヤ」(鼻がきたない。鼻をかみ紙一つ頂戴)といふ言葉や、「ミギ・オラテ・ベトベト・タオ・チエチエ」(右の手がべとべと濡してゐる。タオルできれいにして下さい)といふ複雑な言葉を使つて居ります。

多くの子供等は、満二歳から二歳半までの間に、かやうな複雑な文章の言葉を使ふやうになるものでありまして、前の單文時代に對して、この時期を、複文時代といふことが出来ます。

推敲文時代 二歳半から三歳前後にかけて、幼児の言葉は、一層複雑になるとともに、「アメコンコン・フツナルカラ、オベベ・グチヨグチヨ」といつたやうな、原因と結果との關係を、よく考へ又は推敲したところの言葉を使ひ始めるやうになります。その意味でこの時代を推敲文時代といふこともあります。

かやうにして幼児は、四歳頃までに、とにかく、日常の生活に必要な、一通りの言葉の形式といふものを覚えてしまふものであります。

言葉の數 言葉の數も、四歳頃までは、非常な勢をもつて殖えて参りますが、五歳以後になりますと、今までのやうな勢で覚えるといふことはなく、幾分停滞してゐると思はれるやうな時代になります。

二歳半頃から四歳前後までの間に現れる、言葉の數のすばらしい激増ぶりには、親も全く驚かされることがあります。私の長男が満二歳三ヶ月の頃、繪カードの動物の名前を覚えてゐる間に、ライオンとシシといつたやうに、同じ動物に二つの名前のあることを不思議がるので、ライオンは英語であるといふことを教へましたところ、英語といふことは何のことであるかは勿論解りませぬけれども、英語で覚えるといふことに非常な興味を持ち始め、「トラワ・エイゴデ・ナアニ？」「ウチモイモワ、エイゴデナアニ？」といつたやうに次から次へと、うるさい程に質問し出し、時には和英辭書を引張り出さなければ、答へら

れないといふことさへしばしばありました。

勿論教へ込まうといふ考は、少しもないのでありますから、私はたゞ、彼の聞くがまゝに、それに答へてやつて居りますうちに、何時の間にか、自分で繪カードを並べては、獨りでその名前を英語でしやべり、はては、^{けもの}獸や鳥ばかりではなしに、ソールチャー（兵隊さん）フラッグ（旗）といったやうな名詞まで覚えこみ、満二歳六ヶ月頃には、いろいろの名詞やら、ワン・ツウ・スリーからテンまでの数の數へ方など、約百二十個の英語を、英語から日本語を、日本語から英語をと、どちらから聞いてみても完全に答へられるまでに、覚えてしまつてゐたのには、私も少々驚きました。その後、からだの方の發育が、非常な勢で進むとともに、二歳七ヶ月頃からは、戸外で駆け廻つて遊ぶことに熱中するやうになりました、言葉を覺えるといふことに對しては、餘り興味を持たなくなりました。

言葉の吟味 かやうに、一人一人の子供について云へば、その時期に遅い速いの差はありますけれども、その發達の順序といふものは、大體同じやうに現れて来るものであります。

して、澤山の幼兒を調べた場合の、一般の傾向から見ますと、以上のやうに、四歳頃まで非常な勢で、言葉の數が増加し、それ以後は、數の方はそんなに著しく殖えないけれども、言葉の意味とか、内容とかについて特に興味を覺えるといふ方面に、心の働き方が變つて參ります。

これは、幼兒の心の全體の働きの、次第に伸びて來て、今まで氣のつかなかつた、いろいろの物の性質とか、意味とかいふものに氣がつくやうになつたことを物語るものであります。そして、それだけ、幼兒の心の働きの、深く、廣くなつて來たことを意味するものであり、従つて、その使ふ言葉もそれだけ複雑になつて來たことを示すものであります。

満三歳三ヶ月の時、長男が、私の散歩に出かけるといふ言葉を聞いて、「サンポツテ・ナアニ？」と聞き出しました。「サンポツテネ、チカイトコロヲ、ブラ〜アルクコト」と云つて聞かせましたら、しばらく考へて居りましたが、やがて「チャ・トオイトコロヲアルクノハナアニ？」と反問して參りました。「トオイトコロヘデカケルノワ、エンソク」とい

つてやりましたら、**獨言**のやうに、「チカイトコロラ、ブラブアラクノワ、サンボツチ
オフソネ。ソエカラ、トオイトコロラアルクノワ、エンソクツタイフソネ。」としやべつて
おました。

サンボとかエンソクとかいふ新しい言葉を聞くと、たゞそのまゝ覚え込むといふことで
なしに、それをすでに覚えてゐる他の言葉と比べてみたり、その内容を調べてみたりする
といふやうな、一つ／＼の言葉を吟味するといふことに、興味を覚える時期に来てゐるの
であります。

かやうにして、幼児の言葉は、次第々々に、その性質、内容といふものを確かめられる
やうになつて、一層複雑になつて行くものであります。

自己中心の言葉 ざういふ形の言葉を使ふかといふことから離れて、どんな性質の言葉
を使ふものかといふ點から、幼児の言葉の發達を研究しようとする進み方が、最近重要視
されるやうになつて参りました。

一般の子供について申しますと、満四歳頃までの幼児の言葉は、相手に話して聞かせよ
うといふ氣持からではなく、自分のしやべりたい慾望のまに／＼、自分勝手に話すもので
あります、同じ言葉を續けざまに何遍も繰返してみたり、獨言を云つたり、相手かまは
ずに自分の思ふまゝをしやべり出してしまつたりするのが、みなこの自分本位、我がまゝ
氣分、自己中心といふ時代の幼児の言葉の特色から來るものであります。

これは、この時代の幼児の心の働き方全體が、我がまゝで、自分のことばかりしか考へ
られないといふ特色をもつてゐるから起ることでありまして、まだ他の子供らといつしよ
に、仲よく遊ぶといふ、團體的な、社會的な心の働きが、はつきりと芽生えて來てゐない
からであります。さういふ意味で、この時代の幼児は、まだ團體生活に入りこむだけの、
心の準備が出來てゐないのでありますから、普通の子供ですと幼稚園などに入るのもまだ
少し早すぎるといふことになりますので、この満四歳に達するまでの、時期を幼稚園前期
といつてもよろしいであります。

社会的な言葉 子供の自己中心的な傾向は、満四歳前後までとは限らず、その後も長く続くものでありまして、最近では、小學校時代の學童でも、すべてこの自己中心性といふものを、根本の特色として働いてゐるものであると主張する學者も出て参りました程で、とにかく、子供にとつては、ずいぶん強く働く特色であります。然し、幼児の言葉の發達の方から見ますと、満四歳以後になれば、次第に自分の見て來たこと、聞いて來たことなどを、友達なり、両親なりに告げようとして、相手を選んで話しかけるところの、社会的な會話もだん／＼行はれるやうになつて参ります。

單に見たこと聞いたことを報告するといふだけでなしに、説明して聞かせたり、他の友達に批判を相手に聞かせたり、或は先生にお友達のことを告げ口するといふやうな言葉の使ひ方まで現れて來るやうになります。

これは、幼児の心の働さが、他の人々といつしよに生活するといふことに興味をもつところまで伸びて來たためでありまして、團體生活とか、社会的な生活といふものに對する心

の準備の始まつてゐることを物語るものであります。幼稚園などへ行つて、皆といつしよに遊びながら、かやうな社会的な生活に對する心の準備なり、社会的な言葉の使ひ方の練習なりを行ふといふことは、この時代の子供にとつては、最も自然な要求であり、またそれを満足させてやるのが、幼児の心の發達に對して、最もよい影響を與へるものでありますから、成るべく遊び友達を作つてやるとか、幼稚園へ入れるとかいふ方法を講じて、この自然の慾望を満足させてやる必要であります。

かやうに、社会的な言葉の使ひ方を始め、かつ社会的な生活を好むやうになるところのこの時代は、幼稚園の保育を始めるのに最もふさはしい時期であり、實際また多くの幼児は、満四歳頃から幼稚園に通つて居ります關係から、この時期を、前の幼稚園前期に對して、幼稚園時代と名づけて、兒童心理學上、特別の一時期を區別することもあります。

右に述べましたやうに、幼児の言葉は、簡單なものから、複雑なものへ、形式から内容へ、自己中心から社會生活へと、それ／＼の發達段階を通り、その時期々々の獨特の特色

を示しながら、次第に發達して行くものでありますから、親はその子供の言葉の發達が、どの時期に達してゐるかをよく観察して、その發達の順序に適した、最善の導き方を選ぶやうにしなければなりません。

それらの實際の指導上の注意をお話する前に、幼児の言葉の發達の程度を、比較的確實に診斷するところの、實驗的方法について少しく述べてみることにいたしませう。

二 幼児の發音の發達順序

易から難へ 幼児の發音の發達順序については、前にも少し述べて來ましたが、要するに、最も發音し易い音から始めるといふことが、最も自然になつた方法でありますから、幼児は、先づア・ウ・オ・エ・イといふやうな、極く僅かの筋肉を動かしただけですむところの母音とか、マ・バ・パのやうな、母音を出す時の働きに、僅かに唇の働きをつけ加へるだけで發音されるところの、簡単な子音などから練習し始めるものであります。

次に、タ行やダ行のやうな、舌を使ふや、複雑な發音に進み、ナ行のやうな、舌の先を使ひながら、息を鼻から出すといふ、多少こみ入つた發音もまた、この頃に現れるやうになります。

カ行ガ行のやうに、舌の根元の方を使ふ發音などは、一層困難になりますために、幼稚園に入る頃になつてもまだ充分出來ないといふ幼児をしばしば見受けることがあります。幼稚園時代でも尙完成されずに残る、もつと六ヶしい發音は、ハ行・サ行・ラ行などでありまして、その中でも最も六ヶしいものは、ラ行であります。これは小學校時代に入つて、やうやく完成されるやうであります。

最も遅いラ行 そんなら、これらの困難な發音の一つ／＼が、どういふ年齢のところまで完成されるものかといふことについて調べようとしても、これまで、確實な標準がなかつたのであります。先般私が、名古屋市内の幼稚園の保姆諸姉と協同いたしまして、その園児と、小學校の一年及び二年の學童とを合せた千二百餘人の兒童について、一人々々に

私の考案した發音テストを實施いたしました結果から、こゝに始めて確實な標準を作り上げる事が出来ました。ために、今では、かなり精密に、どういふ發音が、どの年齢のところ、どれ位の割合まで完成されてゐるかといふやうな問題を解決することが出来るやうになりました。

その時用ひました實際の検査法については、第十八講の「幼兒發音發達検査法」のところ、詳しく述べますから、こゝでは、その大がかりな研究の結果の要點だけについて、極く簡単に、かいつまんでお話することにいたします。

この研究の結果によりますと、ラ行が最も六ヶしく、その中でも、ロが一番六ヶしいやうでありまして、ロトツクと完全に發音することが出来ずに、ドトツクといふ幼兒が、満四歳では、百人中三十人程あり、満五歳でも二十五人、満六歳で十六人、満七歳でも十人程あり、満七歳六ヶ月に至つて始めて、百人が百人全部完全にロトツクと發音することが出来るやうになつて居ります。

その次は、レ・リ・ル・ラといふ順序で、いづれも満七歳頃にならなければ、百人が百人全部完成されるといふ時期には達しません。

サシスセソといふ發音は、ラ行よりも早く發達し、満六歳三ヶ月頃には、ほとんどどの子供も完全に發音するやうになります。チンブン（新聞）とか、チエンチエイ（先生）などいふ子供は、先づ幼稚園時代限りで、小学校に入る頃には、ほとんどなくなつてしまひます。

オウネ（お舟）、エイタイ（兵隊）など、いつて、フ、ヘ等のハ行の發音の完全に出來ない子供等は、サ行の場合よりも少なく、幼稚園時代の中頃にあたる満四歳九ヶ月頃には、ほとんど皆完成されます。

以上述べましたところは、普通の發達を示してゐる幼兒の、標準の年齢を示したものでありますから、優秀な幼兒であれば、もつと早く完成し、劣等な幼兒であれば、もつともつと遅く完成するといふやうに、一人々々についてみれば、右の標準に比べて、いろ

と違つた發達を示すことのありますことは、云ふまでもないことであります。中には、九歳や十歳になつてもまだ、オチエンペイ（お煎餅）、オチャア（ち皿）など、いつてゐる子供もありますが、かういふ子供は、私の實際取扱ひました例から見ましても、大抵低能兒か白痴であります。従つて、發音の發達と心の發達との間には、かなり密接な關係のあるものであることを充分心得て、親は常々子供の發音の發達に注意し、以上のやうな標準の發達を示してゐるかどうかを確かめておく必要があります。

三 幼兒の語彙發達の順序

繪の觀察と發表 幼兒の使ふ言葉を、單にその数がどれだけかといふ點から見るだけでなしに、それらの言葉の内容とか種類とかいふ點から見て、幼兒の言語の發達の程度を知るといふこともまた、極めて大切なことであります。

このことについては、前に名詞とか、動詞とか、形容詞とかいふ、文法上の言葉の分け方の觀察と發表 幼兒の使ふ言葉を、單にその数がどれだけかといふ點から見るだけでなしに、それらの言葉の内容とか種類とかいふ點から見て、幼兒の言語の發達の程度を知るといふこともまた、極めて大切なことであります。

方から見た發達といふ意味で少しく述べておきましたが、こゝではそれを更に、その言葉の土臺になる心の働き方と結びつけて、子供が繪を觀察した時に、その繪の中から何を見出し、そしてそれをどういふ言葉で發表するかといふ方向から調べて、そこから子供の言葉の種類、或は幼兒の語彙の發達をうかゞふといふ方法についてお話ししようと思ひます。

これも前の發音の研究と同じやうに、千二百餘名の幼兒の一人一人について、精密に實際いたしました結果を土臺としてお話しするものであります。

たゞし、一人一人の子供について實際に、その子の語彙の發達程度を検査するといふ私の語彙發達テストについては、後で第十八講の二「幼兒語彙發達検査法」のところ、詳しくお話しいたしますから、こゝではその問題にはふれずに、どういふ順序で、幼兒の言葉の種類といふものが發達して行くかといふ點だけを主題としてお話ししようと思ひます。

幼兒に繪を見せた後、それを言はせて、子供の心の發達を研究するといふやり方は、ドイツのシュタルンといふ兒童心理學者によつて、精密に行はれて居ります。それらの新し

い研究を採入れ、いろ／＼考へ合せたあげく、後の第十八講のところに示してあります、第一圖及び第二圖のやうな繪を考案して、これを多數の幼児に観察させ、これを發表させた結果について研究してみますと、やはり、シュタルン等のいつてゐるやうな、心の働き方の發達の順序、従つて、それに伴ふ言葉の發達の順序といふものが、はつきりと現れて來るものであることを確かめることが出來ました。

個物期 月とか、犬とか、鶏とかいふやうな、一つ／＼の物を観察して、それを一つ一つの言葉で發表するといふ時期、即ち個物期といふ時代が一番先に現れることはいふまでもないことであります。

この時期は大體満二才頃から始まりますけれども、繪を観察させて、更にこれを發表させるといふやうな検査法を施すのには、少し早すぎますので、普通は、満三才頃から始めるのが最も適當であるとされて居ります。私の實驗の結果から見ましても、幼稚園時代の子供にとつては、繪の中にある物の名前を一つ／＼あげるといふことは、非常にたやすい

ことで、殊に、舟のやうな、日頃繪本や玩具などで見馴れてゐる物でありますと、極端な低能兒とか白痴でない限り、満四才になりますと、すべての子供がこれを見つけて、發表いたします。

活動期 満二才半頃からは、歩くとか、寝るとかいふ動作や活動を言ひ表す言葉を使い始めるやうになります。その後、繪の中に示された、これらの活動を観察して、これを言葉で言表すといふ働きが出て參ります。私の實驗の結果から見ますと、満五才頃でもつて、大部分の子供が、かういふ動詞を使ひわたるところまで發達するものであるといふことが示されて居ります。かやうな働きを示すやうになつた子供を、活動期に入つた子供と名づけて居ります。

例へば、坐る、洗ふ、轉ぶ、泣くといふ動詞を發表し得るかどうかを調べる検査法の結果では、満五才の幼稚園幼兒は、ほとんど百パーセントこれに合格して居ります。

關係期 更に進むと、遠い、近いといふやうな場所の關係とか、昨日・今日といふやう

な時間の関係、三つ・五つといふ数の関係、雨が降つたから道が濡れてゐるといふやうな原因結果の関係など、いろいろの関係を表す言葉を使い始めるやうになります。かういふ時期を関係期といつて居ります。

大きい・小さい、長い・短いといふやうな言葉は、満四才以前にゐてすでに現れて居りますけれども、遠い・近い、圓い・四角い、右・左等の空間に関する多くの言葉が、大部分の幼児に使ひ始められるのは、私の實驗の結果では、四才半前後であり、二つよりも三つが多いといふやうには、はつきりと数の関係を知るやうになるのも、この頃からである。数をたゞ一つ二つ三つといふ風に暗記するだけならば、教へさへすれば、三才位の幼児でも、十まで位すぐ覚えてしまひますが、實際それだけの数のものを間違ないやうに拾ひ上げるといふやうな、量の問題になると、どんなに教へても、それだけの心の發達が來なければ出來ないのであります。實際の物と結びつけて、十までの数を充分會得するといふことは、普通の發達を示してゐる子供であります。満五才前後にならなければ達しない

いものであるといふことが、私の検査の結果で明示されて居ります。

昨日・今日といふ時間の関係を表す言葉は、更に六ヶしく、満六才の終頃になつて始めて大部分の幼児に使はれるやうになります。

性質期 更に進むと、固い・軟かい、新しい・古い、ザラ／＼する・スベ／＼するといふやうな、物の性質とか、鐵で出來てゐる・ブリキで作つてあるといふやうな、物の材料とかについての言葉を使ふやうになります。私の検査した結果では、これらの言葉が、大部分の幼児に使はれるやうになるのが、満六才から七才にかけての頃であります。かやうな時期を性質期と名づけて居ります。

情趣期 最後に、嬉しい・悲しい・かわいさうといふやうな氣持或は情趣といふものを言表す言葉を使ふやうになります。この検査の結果では、嬉しいといふ言葉は比較的早く現れ、満六才前後の幼児の大部分の者がこれを使い始めて居りますが、怒るといふ言葉はやゝ遅く、六才半以後になつて多く用ひられ、恐しい・かわいさうなどの言葉は更に遅く

七才半から八歳にかけて多くの子供らに使はれるやうになるといふことが明かにされました。

かやうに、言葉といふものには、それ／＼發達の順序があるものでありますから、親はその子の言葉の發達の時期を、以上の標準に比べてよく観察し、自然の時期でない言葉を強いて教へ込まうとしたり、一般の標準的な發達に比べて著しく遅れてゐる子供を放任したりするやうな、無理とか、無責任とかに陥らないやうに、一段又一段と、梯子段を昇らせる氣持で、親切に、そして合理的に導いてやることが最も肝要であります。

第六講 幼兒のお話

一 幼兒の好きなお話

お話を求める心 一つ／＼の言葉を覺えることから、更に進んで、言葉と言葉を結びつけて、複雑な文章なり、お話なりの形にして使ひ始める頃には、すでにその幼な兒の心の中には、カードや繪本の中にある、犬とか猿とかいふ、一つ／＼の名前を覺えるといふ興味の外に、その繪本に描かれてゐるものゝ状態を、次から次へと、お話のやうにして續けて聞かしてもらふことを求める心の働きが芽生えて居ります。

私の長男は、満一歳七ヶ月の頃、始めて、繪の中の一つ／＼の物の名前だけ云つてもらつたのでは不満足で、それよりも、その繪のお話をしてもらふ方が満足であるといふ態度を示しました。

例へば、ペンギン鳥と白熊との旅行のお話の繪本を観察する時など、今までは、初の頁

を開けると、ペンギンを指さして「ア？」といふ疑問のやうな言葉を發しては、「これは何ですか」といふ意味を示し、「それはペンギンちゃん」といつて聞かせると、それで満足して、すぐその次へ進み、他の動物を指さしては又「ア？」と質問するのを常として居りましたが、この頃から急にその態度が變り、何時もの質問だと思つて、「それはペンギンちゃん」と答へてやつてもなかく満足せず、依然としてペンギンのところを指さしながら、何遍でも「ア？」「ア？」と質問の言葉を繰返すやうになりました。そこで、「ペンギンと白熊が、氷のお舟に乗つて、これから遠いところへお遊びに出かけるところ」といふやうな意味のお話をしてやると、始めて満足して、次の頁に進むといふ態度が現れて參りました。これは明かに、お話を求めるところの態度であります。

かやうなお話を求める心の芽生えは、明かに子供の心の大きな變化を示すものであります。それは、すでに自分のものにしてしまつた言葉を、いろいろの使ひ方に當てはめてもらつては、その言葉の使ひ方を一層正確に會得しようとする、子供の自然の要求のやうに

も思はれます。されば、何遍同じお話を繰返して聞かしても、子供は決して飽きません。私の長男の例で見ますと、その後ペンギンと白熊の旅行のお話を、毎晩々々ねだつて、ほとんど一ヶ月餘りも、同じ話を繰返し／＼聞かされたのですけれども、もうこれでいふこととは決してありませんでした。

ところが、その後、公園へ遊びにつれて行つたことがありまして、歸つて來てから、その途中や、公園の模様をお話してさかされると、今度は毎晩のやうに「公園のお話、／＼」といつては、何遍でも同じことを繰返し／＼話させるといふことになつてしまひました。おしまひには、話して聞かせる方が根氣まけしてしまふので、ひよつこり、「それぢや今晚桃太郎さんのお話をしてあげませう」と口をすべらしてしまふと、今度は又毎晩のやうに桃太郎の話がせがむといふ有様であります。

かやうなお話を求める心は、言葉の發達につれてますます盛んとなり、殊に、自分で簡単な敘述的なお話の出来るやうな時期になると、一層それが強く働くやうになります。幼

兒に童話の喜ばれるやうになるのも、この頃からであります。そして、同じ童話を何遍でも繰返し／＼聞きたがるものであるといふことも、この頃の幼兒の一般の特色でありまして、或る兒童心理學者の報告にも、三歳六ヶ月の男兒が、「蛙の王様」の童話を、五十回繰返して聞かされても、それでも尙飽きる様子やうすがなかつたといふ事實を示して居ります。

普通一般の幼兒は、大體三歳三ヶ月頃から、お話を聞くことを喜ぶやうになるものでありとされ居ります。

幼時の記憶と實生活のお話 幼兒がかやうにお話を聞きたがるのは、自分の覺えた言葉に對する親しみとか、その親みの氣持の中に浮び出て來る、自分の過去の生活を、再び現實の生活のやうに楽しむ時の嬉しさとかいふものに驅られてゐるためでありまして、「公園の話」をせがんだ私の長男は、その途中で聞き覺えた新しい言葉を、しば／＼繰返して聞かされることを非常に喜ぶと同時に、その時の有様を、何遍でも話してもらつては、その度毎に、實際公園につれて行つてもらつてゐるやうな、生き／＼した氣持でそれを聞いて

ゐるやうに見うけられたのであります。

かやうに幼兒は、かつて経験したことをよく記憶してゐると同時に、その記憶してゐること、實際目の前で見たり聞いたりして現實に経験してゐること、を、ごつちやにしてしまふといふ特色をもつてゐるものであります。これは、幼兒にはまだ、過去とか現在とかいふ時間に對する心又は觀念が、はつきり現れて來ないために起るところの特色であります。

つまり、現在見たり、聞いたり、跳ねたりしてゐる時に、心の中に起つてゐる變化も、かつてさういふことをした時に心の中に起つたことのある變化が、もう一度今こゝに思ひ出されたにすぎないところの變化も、幼兒には同じやうに感じられて、その間の區別がつかないといふ特色をもつてゐるものであります。

更に甚だしい混亂は、次に述べます想像といふ働きによつて、幼兒が勝手に心の中に作り出したことがらと、かつて實際に経験したことが今こゝに記憶となつて思ひ出されてゐ

ること、今現に目の前で経験してゐることとの三つの出来事を、皆同じもの、やうに考へてしまふといふ特色であります。

かやうに、記憶も、現實も、想像もみんないつしよくたにしてしまふところの心の働きをもつて居ればこそ、幼児は、過ぎ去つたことのお話を何遍聞かされても、作り事のやうなお話を何遍繰返されても、皆それらは、現在目の前で自分が経験してゐること、同じやうに感ぜられますために、何時でも、生々とした、真剣な面持ちと、今そこにそれを見てゐると云はんばかりの輝かしいまなざしをもつて、そのお話に聞きとれるのであります。

しかし、三歳頃までの幼児には、自分で考へるとか、想像するとかいふ心の働きが、まだ充分現れて居りませんから、やはり、自分の経験した實際の生活についての記憶を、再び目前に現してもらふやうなお話の方が、一層生々して興味が深いのであります。

幼児の實際生活といひましても、最初は、母親の顔とか、お乳の瓶とか、玩具といふやうな、親しい人・見馴れた物などの一つ／＼のものについて、記憶するだけであります。

第二年目に入りますと、部屋とか、庭とか、公園とかいふ場所や、その他日常自分が生活してゐる周りとか環境とかいふものを、それ／＼一つのとまりとして覚えるやうになります。

従つて、お風呂場へ行つた時の中の有様や、からだを洗ふ時の様子などを、一つのとまりとした場合としてお話ししてやりましても、或は又、公園の遊び場の場面のお話ししてやりましても、幼児は非常に喜んで、それに聞きとれるものであります。

殊に目で見たと、からだを動かしたことについての記憶が、幼児の頃には、最もよく働くものでありますから、彼等を見て来たものについての話や、とんだり、はねたり、乗つたりして遊んで来たことについての話をしてもらうことを、最も喜ぶものであります。

幼児の想像とお伽話 三歳頃までの幼児は、かやうにその日／＼の生活に現れて来ることとがらについて記憶するやうになり、その記憶を現實に再び生かしてやるやうなお話を、

非常に喜ぶものでありますが、四歳頃になりますと、更に、自分の経験し、記憶してゐることがらを材料にして、いろいろのことを心の中に作り出すといふ想像の働きが現れて來るために、そのお話の範圍が一層廣くなります。

食べた、見た、遊んだの、實際生活のお話よりも、まだ見たことも、聞いたこともないところの、猿がものを言つたり、蟹が泣いたり、白が屋根へ登つたりする作り話とか、お伽話といふものを、眞面目になつて、喜んで聞くやうになります。

子供等は、お伽話を聞きながら、それを實際の自分の生活のやうに考へてゐるものでありまして、丁度、思ひ出したこと、現實の状態とをどつちやにすると同じやうなことがやはり、想像と現實との間にも起つて參ります。

猿が人間のやうに言葉を使つたり、白が人間のやうに屋根へ登つたりするものだと考へ又は想像すると同時に、その想像が實際自分で見てゐる現實の世界のやうに感じられながら、それを聞いてゐるために、時には、お話を聞きながら、聲を張り上げたり、とび上つ

たりしてほんとうにその話の中につりこまれてしまふといふ、生々した態度をはつきりと示すなど、いふ、幼兒獨特のお話の聞き方の現れなどもこのためであります。

幼兒は、單にかやうなお話を聞くばかりでなく、自分の想像したことを、自分でお話することを喜ぶものであります。勿論最初は、ほとんど筋の通らない、全くいゝ加減だと思はれる作り話を、一向平氣で話して行くものでありますが、それは、その瞬間々々に生きようとする幼兒の心の特色から來る自然のお話でありまして、だん／＼経験が重なり、心が發達するにつれて、筋も通り、理窟にも叶つて來るものでありますから、その發達の順序を無視して、初から幼兒に理窟っぽい話を強ひようとしても、かへつて、子供の話さうとする大事な態度をそこねてしまふことがあります。その時／＼によつて、幼兒には、幼兒獨特の世界があるのでありますから、いたづらに、大人の心をもつてこれを抑へつけることのないやうに、成るべく子供の自然の發達を促すやうな導き方をしなければなりません。

二 幼兒の嘘言

幼い爲につく嘘 嘘言即ち嘘をつくといふことは、ほんとうでないことをお話するといふ風に、廣く解釋いたしますと、幼兒にはずるぶん嘘が多いといふことになります。幼兒は、物事の觀察も不充分であり、その記憶もまた不確實なものであり、かつその記憶と想像とがごつちやになり易いものでありますから、小さな蛇を見て來ても、すぐ、こんな大きな蛇がといつて、とてつもない大袈裟な報告をするといふ嘘も、自然に出て來るのであります。

かやうな報告は、嘘といへば云へないこともありませんが、しかし、嘘をつかうと思つて、わざと嘘をついたものではなく、子供の觀察が不充分であつたり、記憶が不確かであつたり、おまけに想像までそれに手傳つたりして、子供がほんとうにそんな大きな蛇を見たと思ひすごし、又固くそれを信じてゐるために、その信じたまゝを述べたにすぎないもので

ありますから、それは、子供の心にとつては、ほんとうでありますけれども、大人から見れば、とても考へられない、それこそ眞赤な嘘に見えるといふだけにすぎないのであります。

これらは、幼兒の心の働きの幼いために、自然に起る嘘でありますから、むやみやたらに、嘘をついたといつて叱るやうなことをせず、一方においては、子供の心の自然の伸び方を待つと同時に、他方においては、その觀察や記憶の誤りを、親切に直しかつ導いてやるといふことが大切であります。

怖くてつく嘘 どんな子供でも、いやなこと、不快なことはこれを避けようとする、強い欲求をもつて居ります。でありますから、過つてお茶碗を落して割つて、ひどく母親に叱られたことがあつたといたしますと、その時経験した、恐しい不快な氣持と、茶碗を割つたことゝが、固く結びついて、幼い子供に、記憶となつて残つて居りますから、若し何かの過ちで、再びお茶碗を落して割つた場合には、又叱られるのだと思ふと怖くなつて、

つい「坊やぢやない」と、心にもない嘘をついてしまふといふことが、しばしば起ります。殊に厳格すぎる家庭には、かうした氣持から、わざ／＼嘘をつかせるやうな状態を作つてやりながら、やがてそれが習慣になつて、手におへないやうになつてから、急にあわて出して、どうして直したらいいのかと思ひ惑ふ家庭も、しばしば見うけられるところであります。

利慾でつく嘘 食べ物とか、玩具とか、その他子供の欲しがるものを、子供が與へられて喜んでゐる時、冗談にでも「それを頂戴」といつて、もらはうとすると、子供は、すぐに「ナアイ！」といつて、後にかくしてしまふことがあります。お菓子なんか、もつと欲しい時など、手の中にまだあるのに、もつと頂戴といひます。もう食べてしまつたのと同じく聞いてみると、「ウン」といひ、時には、「みんな食べてしまつたの」などと見えすいた嘘をいふことがあります。

これなどは、幼児らしい、無邪氣な嘘ではありますが、かういふ自分の利慾の心を満足させるためにつく嘘をいふことが、度重なつて来ますと、困つた悪い習慣になつてしまふことがありますから、さういふ嘘をつくやうな様子が見えたら、早くこれを教へ諭して、直さなければなりません。

嘘は習慣にならぬうちに直せ その他自分をよく見てもらひたいとか、褒められたいとかいふ氣持から嘘をつくもの、ひよつとした機會から、心にもないことを云つたことが、大人を非常にびつくりさせたとか、面白がらせたとかいふことで、偶然に嘘の面白みを覚えて、それからよく嘘をつくものなど、いろいろの原因から嘘をつくやうになる子供が出来るのでありますが、年齢の進むに従つて、次第に幼児らしくない、性質のよくない嘘をいふやうにもなつて参りますから、それを放つておいて、ついに、習慣的な嘘つきにしてしまつてから、手古づるやうな失敗を重ねないやうに、早くそれを發見して、これを導かなければなりません。

すべて子供の心といふものは、その始まりが大事でありまして、一たん悪い習慣をつけ

てしまつてから、それを良い習慣に改めようとする事は、最初から良い習慣をつける時の勢力に比べて、何層倍骨が折れるかわかりません。

これをたとへて申しますと、新しい土地にコンクリートの塔でも建てようとする時、地盤を固めることが充分出来てゐないために、一方の地盤が少し軟かかつたとか、或はそれを築いてゐる間絶えず同じ方角の強い風が吹き通してあつたとか、コンクリートを打つ者が、うつかりして、風の當らないしかも地盤のゆるい方だけへ、コンクリートを厚く澤山打つてしまつたとか、その他いろいろの原因のために、さてその高い塔が出来上つてみると、イタリーのピサの斜塔の再来とでもいつたやうに、一方へ傾いてゐるといふことに気がついたとして御覽なさい。これでは役に立たないばかりか、甚だ危険でありますから、いやでも應でも、これを建て直さなければならぬことになるでせう。その時の打壊しの苦勞を考へて御覽なさい。固いコンクリートを一々ハンマーで叩いて碎いて、その上をの重い石のやうな塊を、運び去らなければなりません。その辛苦たるや、並大抵ではあり

ません。さうした非常な勢力と日數と費用とをかけて、やつと元通りにして、それから又前と同じやうな土臺からの建築にとりかゝらなければなりません。

若しその時の技師なり、監督なりが、目敏い人であるならば、そんなに誰の目にも判る程までに曲つてしまはないうちに、早くその歪みを發見して、相當の手當をすることです。う。地盤を固めるとか、風よけを作るとか、コンクリートの打方を平均にさせるとか、いろいろの工夫やら、手當やらを施して、きつとその塔が傾かないやうに築き上げるに違ひありません。

悪い習慣が子供の心の中に出來ることを、この斜塔の建築に比べてみて御覽なさい。地盤がよく出来て居らず、一方が軟かいといふことは、子供の生れつきがよく出来て居らず、智能の方面とか、感情の方面とかの何れか一方が生れつき劣つてゐるとか、充分發達してゐないといふこと、同じことであります。何時も同じ方から強い風が吹きつけるといふことは、絶えずその子の周りに、悪い友達とか、良くない手本が働きかけてゐるといふ

ことと同じであり、コンクリートを打つ人が、うつかりして、片方だけに厚くコンクリートをつけるといふことは、親が盲目的な母性愛に溺れて、子供の我がまゝな感情なり、慾望なりの方だけを增長させてゐると同じことでもあります。

かうして作りあげた高い塔が、誰の目に見ても傾いてゐるといふことが解るやうになつたといふことは、その子供の悪い習慣が、世間の誰から見ても、あれは困つた子だと氣がつくまでに、ひどくなつたといふことと同じであります。

その時になつて、始めて氣がついて、さてその悪い習慣を直さうとかゝる時の苦心といふものは、その固まつてしまつた高いコンクリートの塔を壊す勞苦と同じことでもあります。それよりも、目敏い技師のやうに、早くその習慣のつき始めを發見して、適當な指導方法を講じたならば、そんな馬鹿げた苦勞をしなくたつてすむのです。生れつきの劣つてゐる方面を早く發見して、その方面の特別な指導をする。悪い友達を遠ざけ、悪い手本を除き、盲目的母性愛を改めるなど、皆それ／＼親の心がけ一つで出来ることばかりであります。

す。

かくて、子供の嘘のつき初めを警戒し、何事も早期に發見して、早期に手當するといふことが、家庭教育の根本原理であるといふことが、お解りになつたことゝ信じます。三つ子の魂百までのたとへ、まことに初めこそが大事なのであります。幼な子の時代の指導が根本であります。

子供らの中には、しば／＼夢と現實とをごつちやにして、ゆふべもらつた玩具をどこへやつたといつて、しつこくねだるやうなこともあります。これなども、もらはないものを、もらつたといつて嘘をついたなどゝ責めることをせず、それは夢だつたのだといふことをよく教へて、親切にさとしてやる必要であります。

かやうに、子供はいろいろの原因で、嘘をつくやうになるものでありますから、親は先づその嘘の原因をよく調べてみて、それからその原因に適應した矯正法を施さなければなりません。

三 幼児の質問

新しいことを知らうとする心 幼児のお話に関係して、もう一つ大切な家庭教育上の問題は、質問といふことであります。子供等は、やがて一人前の人間として、この複雑な世の中に生活して行くためには、いろ／＼のことを知らなければなりません。そこで生れながらにして、新しいことを知らうといふ知識慾が興へられ、それが言葉の發達と、もに、次第にその芽を吹き出し、先づ見るもの聞くものについて、あれは何？、これは何？、どうして？、といふやうな質問の形になつて現れて参ります。

殊にお話を聞いたり、自分でお話をしたりする頃になりますと、人の話の中に出て来る一つ／＼のことについて聞きたりすやうになります。前に述べた私の長男の、満三歳三ヶ月頃に發した「散歩つて何？」といふやうな質問などはその一例であります。

子供の聞きたがる心は、年と／＼に盛んになり、私の實驗した結果から見ますと、幼稚

園の終り頃に當る満六歳前後のところが一番強烈となり、それから小學校時代の學童期に入ると、次第にこの慾望が減じて参ります。

これは一面において、子供の心の自然の發達の道程を示してゐるとも、他面においては、小學校入學後は、いろ／＼の方面で、知識慾を満足させられるけれども、入學前は、それが充分満足させられてゐないために、子供らが、次から次へと質問するだけの心のゆとりをもつてゐることを物語るものであるとも考へられます。

疑問をもつといふことは、人間の發達に對して極めて重大な關係をもつものであり、その疑問を解決しては又その次の疑問を作るといふ生活の態度は、人間の世界を永遠に進歩發展せしめる大きな原動力となるものでありますから、子供の時代からよくこの質問慾の指導に注意し、子供の質問に對しては出来るだけ親切に答へるやうに心がけることが肝要でありまして、うるさがつたり、叱り飛ばしたりするといふ態度は、最も禁物であります。

子供の質問慾は、子供の本能として現れる自然の欲求でありますから、何も六ヶしい理

痛を説明してやる必要はありません。丁度、子供がお腹が空いて食べたいといふ慾望の起る時刻が来たので、御飯をせがむのと同じことで、この際、何も是非おいしい御馳走でなければならぬといふことはない。とにかくお腹を満たしてやればそれで満足するのと同じことで、必ずしも六ヶしい説明をしなくとも、とにかく子供が満足する程度の答を與へてやりさへすれば、それで自然の慾望は満足されるものであります。

幼兒の聞きたがること　そんなら、子供らはどんなことがらについて最もよく聞きたがるものかと申しますと、それはその子供の心の發達により、その周りの事情によつて、それと違ふものではありませんが、とにかく、最初は、目によれ、耳に聞える周りの物とか出來事とかについて、あれは何？　それはどうして？　といふ形で質問され、つひにはどうして生れて来たかとか、死んだら何處へ行くのかといふやうな、六ヶしいところまで進んで行くものであります。

私が澤山の幼兒について調べた結果によりますと、雷鳴について質問する子供が最も多く、満四歳の子供等にあつては、すでにその六十五パーセントまでが、雷鳴のことについて親に質問を發し、その後、年齢の進むに従つて、ますますこの傾きが強くなり、満五歳乃至六歳の幼兒にあつては、八十二パーセントまでこの傾きを現して居ります。その後は次第にこの傾向が少なくなり、小學校一年生の中には、僅か四十八パーセントしかないといふ有様であります。

その次には、電車がどうして走るかといふ質問も相當多く、満六歳前後には約六十パーセントの幼兒が、この質問を家庭で發して居ります。

死んだ人は何處へ行くかといふ質問も、満四歳の幼兒にすでに約半分程現はれ、五歳半頃には五十五パーセントも現れてゐます。

神様はどんなものかといふ質問も、五歳半頃には約半分の子供に現はれて居りますが、どこから生れて来たかといふ質問は、比較的少なく、殊に男の子の場合には、一層それが少なく、満四歳頃のところで、僅かに二十二パーセント位しか現れて居りませんが、女の

子になると、この質問は稍多く、満六歳頃のところでは四十七パーセントといふ割合を示し、さつと半分近くの女の子が、この質問を出して、お母様方を困らしてゐるやうであります。

質問の取扱ひ方 しかし、幼児のかやうな質問は、決して母親を困らさうとか、とつちめようとかいふ魂膽こんたんで發せられるものではなく、たゞ不思議なことで、解らないことについて、それを明かにしたいといふ、自然の欲求から發するものでありますから、子供が納得出来る程度に、いろいろの例なり、たとへなりを引いてお話してやれば、それで充分満足するものであります。

その點をよく辨わかへて、子供の質問を指導しないと、却かえつて悪い結果を來すことがあります。例へば、赤ちゃんはどうして生れるのと聞かれた時、「そんなこと子供は聞くもんぢやない！」と頭ごなしに叱りつけて、何かしらそこに、隠かくし立てするものがあるのだといふ氣持を抱いだかせてしまふと、子供の好奇心が、一層強くそのことに注まがれて、ますます強い

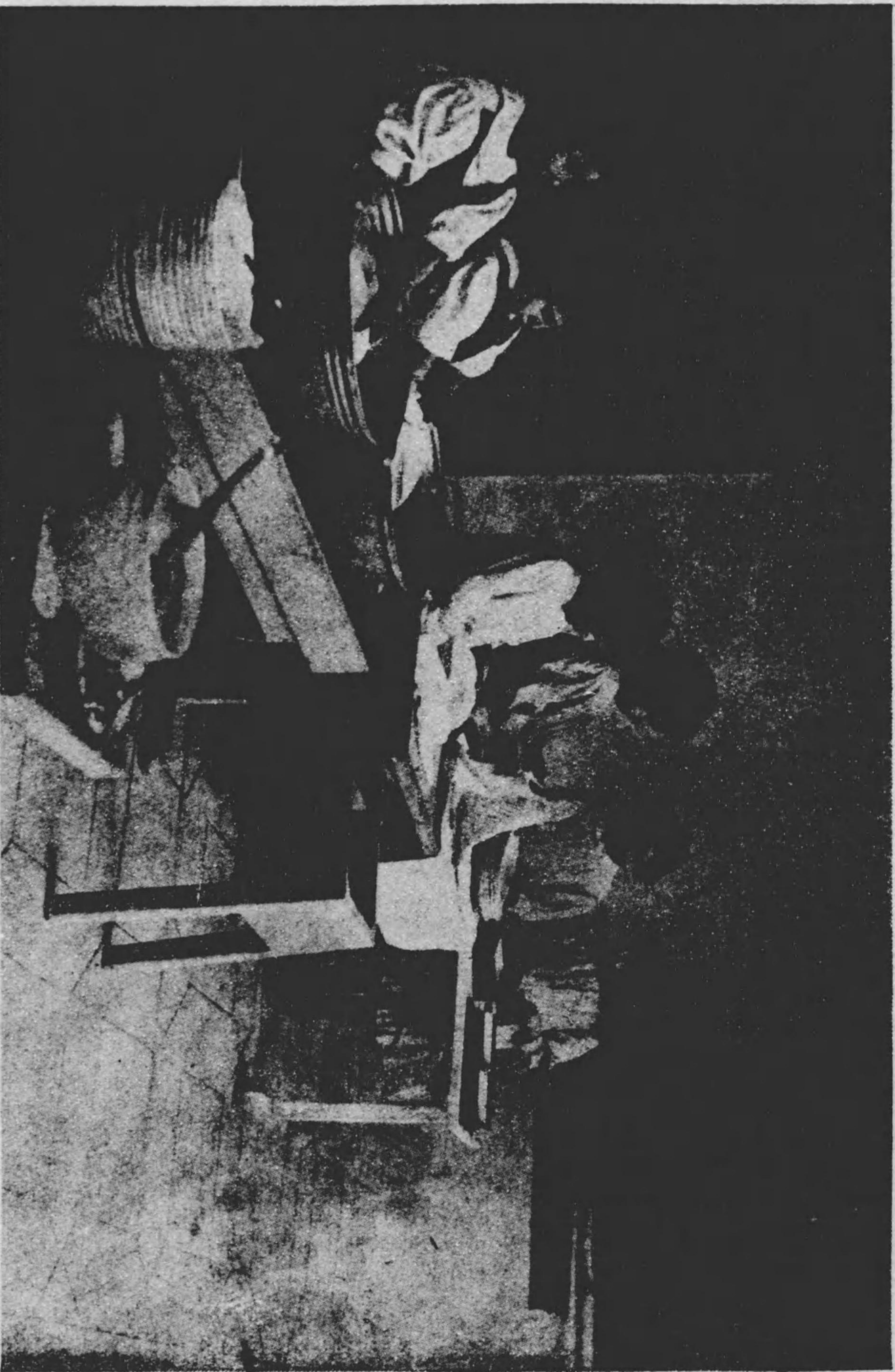
興味を感ずるやうになり、さういふことに觸ふれさせまいと思つてやつた親の處しよが、かへつて反對に、そのことを強く子供に考へさせるやうになるといふことが、しばしば起るものであります。

第七講 幼兒の遊び

一 獨り遊びと玩具の教育

遊びは幼兒の生命 遊ぶといふことは、子供の、生れながらにして與へられた、強い本能の働きによるものでありまして、殊に入學以前の幼兒の生活の大部分は、遊戯といふ活動によつて占められてゐる程、幼兒の遊びといふものは、この時代の最も著しい心身の働きであります。小學校入學以後のいはゆる學童期を、學びの時代といふのに對して、それまでの幼兒期を、遊びの時代と名づけてゐるのもそのためであります。さういふ言葉はまだ聞きませんけれども、或は學童期といふ言葉に對して、新しく遊童期といふ言葉を作つてもいゝのぢやないかしらと思ふ程であります。

子供らは、もつて生れた、自然の心身の働きのまゝに、自由に遊び廻る間に、その心と



お勝手仕事

からだを、最も自然に伸ばして行くのであります。

友達の悪い感化とか、近所の悪い影響とか、その他何でも悪い方のことばかり考へて、世間を恐れすぎるところから、子供に恵まれた、この大事な自然の本能の力を無視して、子供を家庭内に閉ぢ込め、思ふ存分戸外で遊び廻らせるといふことを、避けようとする家庭を、われ／＼はしば／＼見受けます。

かやうな家庭に育つた子供らが、果して明るい、朗らかな、のんびりした子供らしい心の持主になり得るでせうか、事實、陰気な子供、氣むづかしい子供、亂暴な子供等々です。あぶん困らせられて、相談に来られる親たちの中に、私はしば／＼かやうな、子供の心理を、無視した、極端に引込主義の人々を見受けるのです。やはり自然が恵んでくれたところの大事な心の働きを、最も自然に、そして適當に發揮させてやるといふことが、明るい、朗らかな、そして健やかな子供を育て上げて行くのに、最も大切な原理であるといふことを、かういふ親に向つて、力強く主張せずに居られません。幼児に恵まれた自然の強い本

能、それは遊びといふことであり、遊びは幼児の生命であるといふことを、深く心に留めていたゞきたいと思ひます。

幼児の想像と遊び　遊びたいといふ心の働きは、勿論戶外へ飛出して駆廻つたり、ぶらんこに乗つたり、縄とびをしたりといふやうな、全身を動かす働きだけに現れるものとは限りません。もつと落付いた、心の働きを主とするところの遊び、とりわけ、幼児の想像力を働かせるところの遊びとなつて現れる方面もすぶん澤山あります。積木で家を作つて遊ぶとか、砂場で山やトンネルや川を作り、木の切れ端を見つけて来ては、橋をかけたりして遊ぶなどは、皆子供の想像活動の現れであります。

子供は、一片の木切れでも、それを汽車と想像し、家と想像しては、楽しげに遊ぶものであります。決して極彩色の精巧な汽車でなくとも、立派な家でなくともよろしいのであります。

かやうな子供の想像の世界と、そしてその遊びとを考へ合せるならば、その遊びを最も自然に、そして有効にさせるためには、成るべく子供の想像を働かせるゆとりのあるやうな遊び道具を選んでやるといふことが、幼児の教育上、最も必要なことになつて参ります。

この點から考へますと、今までの家庭の玩具の選び方などについても、餘程改良すべき點があるやうに思はれます。ドイツの児童心理學者シュテルンが、今までの玩具が、餘りに精巧な、實物に近いやうな玩具であつて、子供の想像力を働かせる餘地の少ないことを非難して、むしろ、もつと／＼子供の想像力を、思ふ存分に働かせることの出来るやうな形のきまつてゐない材料を採り入れることを理想としなければならぬと主張して居りますのも、この意味からであります。

切つたり、疊んだりしては、いろ／＼の形を折り出すところ　折紙とか、重ねたり、並べたりしては、家なり、汽車なりを作るところの積木とか小箱とか、堀つたり、築いたりしては、山なり、川なりを作るところの砂とか、丸めたり、延ばしたりしては、人形なり

大なるの恰好を作るところの粘土とか、圓い瓶に入れてみたり、四角な罐に入れてみたりして、いろいろに形をかへられるところの水とか、その他子供が、思ふ存分想像力を働かしては、組立てたり、こわしたりして遊べるところの材料といふものが、いくらでもそこいらに、ころがつてゐるのであります。かういふ未完成な材料といふものを、もつとく家庭でも、幼稚園でも採り入れなければならぬと思ひます。

獨り遊びの時代 子供の遊びは、子供の心の發達の、自然の順序によつて現れて來るのでありますから、想像の働きの盛んな幼兒の時代でも、たゞ自分のことだけしか考へず、お友達とか、世間の人々とかいふものについては、ほとんど心が向かないといふやうな時代には、やはり、それに相應しい、自分獨りだけの遊びといふものが、毎日の子供の遊びの大部分を占めるやうになります。かういふ時代には、やはり、その子供の心の自然の順序にかなふやうに、適當な獨り遊びを選んでやらなければなりません。

獨り遊びの時期は、普通四歳頃までとありまして、その遊び方は、男の子と女の子とで

多少ちがひますけれど、先づ最初に、何でも、こわしたり、バラ／＼にしたがる、破壊的な遊びが現れ、それから物を組み立てたり、作り上げたりするところの、建設的な遊びが現れて來るものであります。

紙をやぶいてみたり、せつかく並べた積木を、ゴシヤ／＼に散らしてみたり、玩具をこわしてみたりして、嬉しがつてゐる時代が、破壊的遊戲の最も盛んな時代でありまして、これは、からだ中の有り餘る勢力を、何かによつつけて解放してしまふことによつて、一種の快感を覺えるところの、自然の要求から來る遊びであつて、決して惡意があつてやるものではありませんから、さういふ場合、一々これをとがめたてたり、その遊びを妨げたりするといふことは、子供の自然の發達に適つた導き方を、その時期々々に應じて最も、適切に施して行くいふ家庭教育の立場から見ますと、餘り望ましいことではありません。

しかし、それかといつて、何時までも、かうした破壊的な遊戲だけに止まつてゐるやうでも、それは自然の發達の順序からいつて、餘りにおくれすぎて居るのでありますから、

そのまゝ放任しておくといふことも、子供の自然の發達を促すといふ、家庭教育の立場から見て、これまた餘り望ましいことではありません。さういふ場合には、やはり、發達の順序に従つて、次第々々に、その破壊的な遊びから、建設的な遊びへと導いてやることを心がけなければなりません。

幸ひ、子供らには、周りの人々のすることを真似たがるといふ、模倣本能を惠まれて居りますから、この自然の力をうまく利用して、かういふ場合には、積木で家を作つてみせるとか、人形に着物を着せてみせるとか、その他の建設的な遊びをやつてみせて、子供が自然にそれを真似て自分でもやつてみる、やつてゐる間に自分でもそれに面白みを感じて次第々々に破壊的の遊びから建設的の遊びへと移り變つて行くといふ、自然の變化發達を促すやうに、指導することが最も望ましいことでもあります。たゞし、この際、功を急いで、早く教へ込まうとする態度をとることは、つゝしまなければなりません。たゞ、真似る機会を、成るべく多く與へて、子供が自然にそれを真似るやうになるといふところに重きをお

いて導くといふ態度のみが、最も望ましい教育態度であります。それは、遊戯といふものが元來最も自然なものであり、自由なものであり、その自然な活動の中に、最も力強いところの、自然の發達をとげて行くものであるといふことから考へても、すぐうなづかれることゝ思はれます。

建設的遊戯は、早いものになると、二歳頃から現れるものもありますが、普通は、三歳から四歳の間に見れ始めるものであります。これを男女について比較してみますと、女の子は一般に男の子よりも、その現れる時期がおそく、普通、四歳前後から始まるものであります。しかもその心の働き方からみても、女の子は、概して、模倣的な遊戯を好み、といふやうなものを主なるものといはれますが、これに反して、男の子は、いろいろ新しいことを考へ出して行くといふやうな、獨創的な遊戯を多く好むものであります。こゝに早くも、男と女との心理的な違ひが、遊びを通して表されてゐるといふことは、注目すべ

まことがらであります。

玩具を興へる時の注意 子供の遊びを通して、子供の心の自然の発達を促すために、どんな玩具を選ばなければならないかといふことについては、今まで述べて参りましたところで、大體その要點をつくしてゐると思ひますけれども、尙その他の事柄で、特に家庭教育上、注意しなければならぬ點について、一言つけ加へることにいたしませう。

それは、餘り澤山の玩具を興へすぎないやうに注意するといふことであります。貧しくて玩具を興へられないといふ子供は、ほんとうに氣の毒なものでありますけれども、それと同時に、餘り多く興へられる子供もまた、ほんとうに氣の毒なものであるといふことを、先に述べたシュテールンも申して居ります。

これは、興へられた材料で、いろいろ想像し、工夫しながら、一つのものを作り上げてみるといふ、熱心な態度を、幼な兒の時代から、その遊びを通して自然に捕えつけて行くといふ點から見て、非常に望ましいことでありまして、いろいろの玩具を一度に澤山興へ

られたために、どれもこれも、半端な遊び方をしては、氣の散り易い、移り氣の多い、うつべらな態度を、自然につり上げられてしまふ子供に比べて、種類は少ないけれども、しかもそれを材料にしていろいろのものを組立てることの出来るやうな玩具を興へられる子供の方が、どんなに幸福であるか判りせん。

アメリカの児童心理學者ワットソンもやはり、子供に、一度に澤山の玩具を興へることはつゝしまなければならぬといふことを述べまして、殊に大人の考を中心として作つたいろくの六ヶしい玩具を、澤山興へるといふことは、子供の教育上望ましくないものであるといふことを強く主張して居ります。例へば母親でさへもその使ひ方が解らず、買つて来てくれた父親の説明を聞いてやつと解るといふやうな、六ヶしい器械仕かけの玩具などを、子供に興へる親がありますが、こんな玩具の興へ方をして居りますと、子供は六ヶしいものですから、自然母親にそれを動かしてくれと頼む、母親はそれをうけ入れて動かしてやるといふことが、繰返されるやうになつて、その結果、何時とはなしに、その子の心の中に、人

を頼るといふ心即ち依頼心を植ゑつけてしまふといふ恐れがあるといふのであります。かやうなわけで、玩具を選ぶ時には、何時でも、その玩具をもてあそぶ子供の心の發達とか、程度とかいふものを考へて、その子供が獨りでも面白く遊べるやうな、年齢相應のものを選んでやるといふことを、常に頭において選ばなければなりません。

二 仲間遊びと社會心の芽生え

仲間を求める心 子供といふものは、元來、我がま、勝手な、利己的なものでありますけれども、それは、先づ自己の生命を保存するといふことが人間生活の第一歩であるところから、當然に起つて来る、本能的な働きでありまして、人間の生命の發達の順序上、止むを得ないことがらであります。

しかし、やがては、他の人々といつしよになつて、社會生活をして行かなければ、ほんとうの自己保存が出来なくなるものでありますから、子供の心の中にも、何時とはなしに

人々と交る、仲間を求めるといふ、社會的な心の働きが芽生えて来るものであつて、その大本は生れながらにして興へられて居るのであります。いはゆる社會的本能といふのがそれでありませう。

初は、母親とか、乳母とかいふ見馴れてゐる親しい人々の顔を見て喜ぶといふ形に、この働きが現れて参りますが、後になりますと、遊び相手を求めるといふ形で、遊戯の中に、この社會的な心の芽生えが現れて参ります。

女の子が、お人形遊びをしながら、お人形に話しかけたり、それに御飯を食べさせようとしたりするのは、獨り遊びの一種ではありますけれども、すでに想像の上で、仲間を作つてゐるものとも見ることが出来ます。

しかし、ほんとうの遊び仲間を求めるといふ心は、五歳以後から始まるのが普通であります。例へば、相手の子供といつしよになつて、自分はお醫者さんになり、相手を病人にして、お醫者ごつこをするとか、或は先生と生徒とに分れて學校遊びをするとか、或は

運轉手と車掌しやうじやうとに分れて電車でんしゃごつことをするやうな遊び方を始めるのがそれでありませう。

かやうな仲間遊びを始める前に、子供が、よく他の子供の遊んでゐるところへ行つて、初ははづかしさうに眺ながめて居りますけれども、その中に、向ふの子供らが、キャツ／＼といつて駆かけ出したり、跳はび廻つたりして遊んでゐるところを見ると、何時の間にか、それらの子供の方へ引きつけられて、いつしよに駆かけ出してゐるといふことを、しば／＼見うけるものであります。私の長男は、満二歳六ヶ月の頃に、始めてかうした態度を示しました。これがつまり、仲間を求めようとする心の芽生えであります。

仲間遊びを始める時期　しかし、仲間を求める心が芽生えても、さて今度は、仲間といつしよに遊ぼうといふことになりませうと、自分本位の我がまゝが中心になつてゐる時代の幼な兒では、相手の玩具を奪うばつて、自分のものにしようとする、持前ももまえの我がまゝが出て來るために、相手の子供にいちめられる、泣かされるといふやうなことが出來て、なか／＼仲よく遊ぶことが出來ないものであります。

しかし、泣かされても、すぐ忘れて、又子供らの遊んでゐるところに駆かけ出して行きたいといふ強い氣持にかられる。そして飛び込んで行つては又、自分の我がまゝを發揮はつして、皆にいちめられる。それでもこりずに又出かける。かうしてゐる間に、幼な兒の心の中に、自分勝手な我がまゝばかり言つてゐると、皆にいちめられるものだ、皆といつしよに面白く遊ぶためには、自分の欲ほしいといふ氣持も、或る程度までおさへつけて、皆と仲よく遊ばなければならぬものであるといふ、社會的な心の持ち方が、知らず／＼の間に教へられて來まして、だん／＼仲間遊びが出来るやうになつて參ります。かやうな仲間遊びの出来る。社會的態度の現はれ始めるのは、普通五歳頃からとされて居ります。

初は一人か二人を相手にして遊ぶだけですが、六歳頃から、三人以上の相手を作つて、學校ごつことか、戦争ごつこのやうないろ／＼の團體遊戯をするやうになります。これらの團體遊戯の間において、子供らは、心身一切の精力を傾かたむけて、思ふ存分遊び廻りながら、知らず／＼の間に、その心とからだとを練ねり鍛たへて行くものでありますから、

子供の心身の健全な発達を促すといふ點から見ても、この時代の仲間遊びといふことは、非常に大事な子供の生活であるといふことが、うなづかれるでありませう。

● 社会心の養成 仲間を求めようとする心や、それを仲間遊びにおいて、最も満足に實現させようとする幼児の心の自然の働きは、やがて社会に立つて一人前の生活をする時の、いろいろな社会心即ち、共同一致とか、正義公正とかいふ、社会人として是非なくてはならないところの心の働き方の土臺であり、これが最も自然な子供遊びの中において、知らず／＼の間に築き上げられて行くものなのでありますから、これこそは家庭教育の時代において、充分な注意を拂はるべきなのであります。かくしてこそ立派な社会人たるの基礎が造り上げられるわけなのであります。

● 勿論、社会心を養成するといつたからとて、わざわざ特別な方法を考案して、子供らを教育的に遊ばせなければならぬといふやうな、究極なことを要求するものではなく、ただ自然の仲間遊びの間に、かやうな社会心が、何時とはなしに培はれて行くやうに、出来る

だけ遊び相手を作つてやるやうに、注意してもらひさへすればよいのであります。

殊に、友達の悪い感化といふ一面だけ考へて、仲間遊びが、いかに子供の心やからだの発達、とりわけ、社会人として立つのに必要な社会心の養成に對して、大事な働きをするものであるかといふことを知らずに、無暗やたらに、子供を家の中に閉ぢ込めようとする親に向つて、この點を特に強く主張したいと思ひます。

三 遊びと幼児の本性

十人十色 昔から十人十色、百人百色とか申しまして、人々はその顔かたち一人々々皆違ふやうに、その心の働き方もまた千差萬別であるといふことを教へて居りますが、同じことは幼児の心の働きについてもいへることでありまして、賢い子供もあれば、愚かな子供もあり、氣短かな子供もあれば、のんきな子供もあるといつたやうに、その子供々々によつていろいろの特色をもつてゐるものであります。

かやうな特色が、子供の遊びの中に最も露骨に現れるものでありまして、一つの玩具の遊び方を見てゐても、伶俐な子供と、馬鹿な子供との遊び方には、自ら違つたところがあり、落付いた子供と、そつつかしい子供との違ひもまた、自然その遊び方に現れて來るといふ有様であります。

かういふ遊び方に現れて來る十人十色の特色は、やがてその子供らが、大人になつた時に、どんな特色を現すかといふことを、豫測するところの大事な手がかりになるものであります。いはばその人の一生の生活の大本になるところの根本特色とか、本性とかいふものを、その人の幼な兒の時代の、遊びの中に、それとなく現してゐるものであります。従つて、若し親が、その子の遊びをよく観察して、その特色を見抜くことが出来るならば、その子が將來、どんな性質の人間になるかといふことを、豫測することが出来るわけです。世界の四聖の一人とたゞへられた、支那の孔子様が、後に聖人として崇められるやうな立派な人になれるだけの芽生えを、すでにその幼時遊びの間に現はし、何時で

も、神様を祭るとか、禮儀作法の真似事をするとかいふ遊びを喜んでなされたといふことなども、その人の本性が、早くその幼兒の頃において現れるものであるといふことを物語るものであります。

遊びに現れる幼兒の本性 かやうな孔子様の例は特別の場合としても、一般の子供の場合でも、さういふ特色又は本性といふものを、遊びの中に見出すといふことは、決して出來ないものではありません。

例へば、遊びの最中、何か困つた出來事に出つくわしたやうな時、よく前後の事情を考へながら、その困難を切りぬけて、あくまで自分の遊びの目的をやりとげなければ止まぬといふやうな性質の子供とか、行きあたりばつたりで、小さな困難にぶつつかつてもすぐその遊びの方面を變へてしまふやうな性質の子供とかいふやうな特色は、ちよつとした遊びの間にも、われ／＼はしば／＼これを觀察することが出来るものであります。

長男が満一歳七ヶ月の頃の、初秋の或るお天氣な日の午後の出來事であります。縁先に

其餘の金盃の伏せてあるのを見つけて、自分の手でたゞいて音を出して遊ぼうとしたのでありますが、縁先へさし込む残暑の陽の光に、金盃が焼けてゐたために、それをたゞくと同時に、彼は「アチッ」といつて手を引込めてしまいました。どうするのかわかと思つて、ちつとして見てゐましたら、しばらく考へるやうな様子をした後、丁度その側に落ちてゐた新聞紙を拾ひ上げて、その金盃の上にかぶせて、その上から、ガン／＼たゞいて大喜びの態であります。

若しあの場合、彼が「アチッ」といつて手を引込めたまゝ、二度とその金盃に目もくれず、他の遊びに移つてしまふやうでしたならば、私は彼の本性の或る現れを、頼りない氣持で、認めなければならなかつたかも知れません。

その他、同じ玩具を、引張つてみたり、押してみたりして、何時までもいちくり廻して熱心に観察してゐる子供と、ちぎに飽きて放り出してしまふ子供、或は、幾つになつても獨り遊びばかりで、仲間と遊ぶことの出来ない子供、早くから仲間を作つては、團體遊戲

に熱中する子供、それから、何時でもお山の大将になつて、他の友達に號令しこれを統御する子供と、何時でもピリの方について、おどなく引張り廻されてゐる子供等、それぞれその子供の本性を、遊びの中に、自然に現してゐるものでありますから、家庭でも、幼稚園でも、この點に深く留意して、子供の遊びの中から、その子供の本性を見出し、その子供の伸び行く先を豫想して、適當な指導方針を打立てるやうに努めなければなりません。

第八講 幼児の繪と歌と踊

一 幼児の美感

藝術心の芽生え 美しい繪本を見ては喜び、妙なるピアノの音を聞いては微笑み、面白いお伽話を聞いては嬉しがるといふ幼な兒の心、それらは皆藝術への憧れの心の芽生えであります。

繪畫、音楽、文藝等の、高尚な藝術も、その源は、かやうな、美しいもの、麗しいものを喜び憧れるところの美の感情に發して居ります。

人間の心を美しく、麗しいものに仕立て、くれるものは、實にこの藝術の力であるといふことを知るならば、幼な兒の心に芽生えた、この藝術への憧れのきざしを、大事に育て、行くことは家庭教育の最も大切な働きであることを悟ることが出来るであらませう。

殊に、やゝもすれば荒々しい、粗野な感情に走り易い子供の生活を、麗しい、純美な情操の生活に導いてくれる大きな力が、この藝術への憧れの芽生え、幼児の美感の中に秘められてゐることを知る時、われ／＼は、その氣高い幼児の美感の生ひ立ちを究め、その適當な指導方法について、深く考慮をめぐらすといふことが、親の重大な責務であるやうに感ずるものであります。

幼児の美感は、勿論、ほんとうの藝術心といふものにはまだ進んで居りません。ほんとうの藝術心といふものは見たり聞いたりして、美しいものを受け容れてゐる時に快い感情を起すばかりではなく、更にその見たり、聞いたりすることを真似ては、自分で描いて見たり、歌つてみたりするところへ進み、つひには、真似だけでなく、自分で新しいものを作り出して行くところに、ほんとうの快の感情を感ずるといふところまで行つて、始めて會得されるものであります。

受容即ち受け容れて美の快感を起し、次に模倣即ち真似て美の快感を起し、最後に創作

即ち自分で新しいものを作り出して美の快感を起すといふ、この三つの段階又は順序といふものを踏んで、ほんとうの美感即ち藝術心に到達するものであります。

幼児の時代は、この中の受容と模倣との時代でありまして、創作といふことは、なかなか幼児には望まれない六ヶしい働きであります。

お伽話の場合について考へてみましても、普通の子供は、四歳頃から、面白いお話を聞くことを非常に喜び、五歳頃から、親や保母の聞かせてくれるお話を真似して、他の子供に話して聞かせることを喜ぶやうになりますけれども、自分で新しいお話を作つて、他の子供に聞かせることを喜ぶといふやうな、創作的な興味とか、美感といふものは、この時代ではなかなか現れて参りません。

しかし、この受容と模倣との二つの段階は、幼児の藝術心の芽生えとして、極めて重要なものでありまして、この心が、次第々に伸びて行つて、つひには創作の心にまで達するのでありますから、この時代からして、この芽生えを、親切に育んで行かなければなりません。

せん。

美感の養成 かやうに、幼児は、美しいものを見たり聞いたりして美感を起し、又それを真似ては美感を感じるものでありますから、幼児の周りに、かやうな美感を起させるものを、絶えず興へておくといふことが、美感を培ひ、これを伸ばして行くことに對して、極めて大事な役目をすることになるのであります。

春は花、夏は青葉、秋は紅葉に冬は枯木に咲いた雪景色など、四季折々の自然の景色に親しませるもよいでせうし、或はまた、美しい花を活け、綺麗な繪を掲げなどして、子供の部屋なり、保育室なりを美化し、妙なる音楽のレコードを聞かせ、ピアノを奏で、歌を歌つて聞かせるなどして、子供の周りを麗はしい美のリズムの世界と化するなど、皆それ／＼美感を養成する、最も望ましい方法の一つであります。時にまた、彼等に歌はせる、掛かせるといふところまで進ませるならば、一層その美感の發達を促し、その進歩をはかる方法として、更に望ましいことがらであります。

すべて教育といふことは、子供の心の中に、生れながらにして與へられてゐる尊い力を、周りの人々の力で引出すことなのでありますから、子供の美感を養はうとする場合にも、その周りの人々が、自ら麗しい美的情操を豊かに備へて、毎日の生活の中に、それを自然に現して行くのに越したことはありません。

偉大なる藝術家の生ひ立ちを調べてみる時、われわれは、その偉人の幼な兒の時代の家庭生活において、すでに、その母なり父なりから、力強い藝術教育の感化を、知らず／＼の間に受けてゐるものであることを、しばしば発見するであります。勿論それは、その子供の非常に優れた天分によることは、否まれないことでもありますけれども、その天分を早くから適當に育み伸ばしてくれた、親の藝術的感化といふ、家庭教育の力に待つところも、ずいぶん大きいものであるといふことを忘れることは出来ません。

私がかつて多数の幼兒について、その藝術的興味を、實驗的に研究いたしました時、それと親の趣味娯楽との關係を調べてみましたところ、藝術といふことについてほとんど無關心であるところの家庭に育つた幼兒は、その美感なり、藝術的關心なりにおいて、最も劣り、これに反して、高尚な藝術に對して、深い趣味を持つところの家庭の幼兒は、麗しい美感を豊かに恵まれ又發達させられてゐるものであるといふことが、はつきりと統計の數の上に現れて参りました。

かくて私は、朝らかな、麗しい人格の土臺を、三つ子の間に築き上げようとするならば、幼兒の荒々しい感情を、次第に純化してくれるところの、この大事な美感を、幼兒の間に培ふために、先づ親自ら、高尚な藝術に對して、正しい理解と、深い興味とをもち、その家庭の内に、豊かな藝術的氣分をたゞよはせて、知らず／＼の間に、幼兒の心を、その氣分の中にひたらせるやうに心がけなければならぬものと信じます。

二 幼兒の繪

智能の發達を物語る繪 幼兒の描く繪は、その心のいろ／＼の方面の發達を物語るもの

として、兒童心理の研究上、大切な意味をもつものであります。

丁度、幼兒の言葉が、その一つ一つの單語の數や、種類や、その組合せの文章や、その他お話に現れたいろ／＼の言ひ表し方やなどから、子供の心の中の、智能の方面の伸び方とか、想像力の發達とか、藝術心の芽生えの程度とかを、うかゞひ知るのに大事な役目をなすものであると同じやうに、幼兒の描く繪もまた、どんなものを描き現してゐるかといふことを調べてみると、そこに、子供の智能や、想像力や、美感などの特色を物語るところの、大事な手がかりが示されてゐることに気がつくものであります。

先づ賢さの生れつき即ち智能の發達と、子供の繪との關係について見まするに、伶俐な子供とか、智能の發達した子供程、その繪の中に描き出すいろ／＼の物の數なり、種類なりが多くなるといふ、一般的な傾きを示すものであります。子供が、何物かを描き出すとするからには、それらの物についての觀念なり、心の姿なりといふものが、その心中に出來てゐなければ、不可能なことでありますから、かやうに澤山の物を描き出すとい

ふ賢い子供の心の中には、やはり澤山の觀念が生れ出るやうな、心の準備なり、發達なりが出來てゐるものと見なければなりません。

かやうな意味から、幼兒の賢さを調べるところの一つの方法として、よく人物畫を描かせて、そこに描き出された、目とか鼻とか、手とか脚とかいふもの、數、言ひ換へれば、それらについての觀念の數といふものを數へて、その多い少ないによつて、幼兒の智能の發達の程度をきめるといふやり方が、近頃兒童心理學の方で行はれるやうになつて参りました。

普通の發達を示してゐる子供でありますと、人の繪を描いて下さいといつても、満三歳頃では人だか何だか解らないやうな、いはゆるなぐり描きの繪をかいただけでありますけれども、四歳頃になりますと、やうやく、頭の部分と、脚の部分とがはつきり分れて、頭に當る圓の中に、眼や口や鼻に相當するものを書き入れたりして、人らしい恰好の整つた繪を描くやうになります。

五歳前後になりますと、更に頭と脚との間に、胴體の部分をかき入れ、六歳前後には、腕を加へ、顔に眉を入れるといふやうに、だん／＼その描き表す内容が多くなり、七歳前後には、頭の髪とか帽子とかをかき入れ、八歳前後には、頭と胴との間に頸を入れ、手の指をかき、顔や頤がはつきり現れ、着物をつけるといふやうに、ますます整つた繪を描くやうになつて参ります。

勿論これは、普通の發達を示してゐる子供の例でありまして、中には、四歳頃ですでに腕も胴體も手の指も眉も頭の髪も皆揃つてゐる、まごまごした繪を描くところの、優秀な子供が現れたり、八歳になつても、頭と脚だけ位しか描き表せないといふ劣等な子供が現れたりするといふやうに、例外の出て來ることはいふまでもないことであります。

この事實からして、今日、子供の人物畫の中に描き出された、いろ／＼の觀念の數を、それ／＼點數に改めて、その合計點から、その子の智能の發達程度を知るといふ、新しい幼兒智能検査法といふものも行はれるやうになつて参りました。

描畫の段階 子供の繪は、かやうに、そこに描き出された觀念の數といふ點から、その子の心の發達の順序段階を示すばかりでなく、その描き方又は表現の形式といふ點から、やはり、それ／＼の發達の段階を物語つてゐるものであります。

第一の段階は、鉛筆を持つた手を、たゞ譯もなく、右・左・上・下と、紙の上に引張り廻して、なぐり書きをする時代でありまして、普通、満二歳頃から現れ始めます。

第二の段階は、何等の目的も、計劃もなしに、鉛筆とか、クレヨンとかをもつて、紙の上をなすり廻してゐる間に、何かしらの形らしいものが出來て、他の人々には何だか判らないけれども、子供自身がそれを、電車だとか、家だとか説明してくれば、成る程、さうらしくもあるといつたやうに、始めて解るやうな程度の描き方をする時代でありまして普通、三歳前後がこの時期に當ります。

第三の段階は、四歳頃から始まり、やうやく、人を描くとか、木を描くとかいふ或る目的をもつてかくやうになり、しかも、その目的のものが、他の人から見ても、はつきりそ

れと判断の出来るやうな繪を描くやうになる時代でありまして、二年間位かういふ時代を續けてゐるうちに、次第にその描き方も上手になつて参りますが、しかし、多くは、汽車とか、犬とかいふ一つ／＼のものを、別々に描くだけで、幾つかのものを組合せて、まとまりのある繪を描くといふことは、まだ出来上らない時代であります。

丁度、オンマとか、ニーチャンとかいふ一つ／＼の言葉ははつきりいへるやうになつても、ニーチャンがオンマにノンノしてゐるといつたやうな、まとまつたお話の形にまで、幼児の言葉が発達するまでには、その後相當の年月を要するのと同じやうな關係であります。

従つて、太陽が山の上に出て、子供が萬歳をしてゐるところといつたやうな、お話になるやうな場面を描く時期は、かなり後になつて現れるものでありまして、普通は、六歳前後からでなければ見ることが出来ないやうであります。この頃から、子供は、好んで景色の繪をかくやうになります。

かやうに、年齢の進むに従つて、幼児の繪は、次第に複雑になつて行きますけれども、しかも幼児の繪には、常に大人のそれと違つた、子供らしさといふものがあります。即ち第一に、その描き出されたものが、實物と似てゐるか否かといふことについては、ほとんど「無關心」であつて、たゞ子供自身の感じたまゝを、描き出すにすぎないといふことであります。従つて、太陽が地面のところであつて光つてゐたり、人間が空中に横倒しになつてゐたりする繪を、子供らは、平氣で描いて、少しも怪しまないといふことが出来て来るわけであります。

描畫に現れる美感 繪を描くことによつて、子供が美感を満足させ、又それを發達させるものであるといふことは、いろいろの點から観られるのでありますが、殊に美感といふものが、われ／＼の心の働きのリズムに伴ふ快感から起るものであるといふ點から考へて繪を描くといふこと、リズム感情との關係について、一應考へておく必要があります。ドンドコ／＼／＼といふ太鼓の音を聞いてゐる時のやうに、強い音と、弱い音とが、入

り交つて響いて来て、それを聞くわれ／＼の心の中に、一種特別な快感を起させる時を、われ／＼は、その強弱の音の變化によつて、リズム感情を湧き起させられてゐるといふのであります。高い音と、低い音とを組合せたり、長い音と短い音を組合せたりして、いろいろの變化のある音を出すところの音楽といふものも、やはりわれ／＼のリズム感情といふ一種の美感に訴へればこそ、あんなに面白い、愉快な感じを起させるのであります。

ところが、かやうな變化に伴つて起るところのリズム感情は、耳で聞く時ばかりでなしに、目で見るとも手で描く時でも、やはり同じやうに起つて来るものであります。強い光と弱い光、明るい色と暗い色といったやうな組合せを見て居りますと、やはりわれ／＼は、一種のリズム感情を起して、それらの色や光に對して、快い感じを起すものであります。

同じことが、からだのどこかの筋肉を、強く働かせたり、弱く働かせたりするところの變化を起させてみると、やはり起つて参ります。幼兒が、鉛筆を持つた手を、紙の上で、

右へ引いたり、左へもどしたり、上へ引きあげたり、下へ引きおろしたりする度毎に、その子供の手や、腕の筋肉に、張り切つた感じ即ち緊張の感と、弛んだ感じ即ち弛緩の感とが、こも／＼起つて、そこに一種のリズム感情といふ快感又は美感が伴ふものであります。幼兒が、鉛筆なり、クレオンなりを見つけると、襖であらうが、壁であらうが、處さらはず、同じやうな線を、繰返し／＼ゴシヤ／＼に書きなぐつて喜んでゐるといふのは、そこに何物か描き出されたといふ、物珍しさに對する興味も多少手傳ふでありませうけれども、それよりも、この無意味な左右上下の手の運動をしてゐる間に與へられるところの、筋肉から来るリズムの快感に對する、幼兒の自然の欲求がさうさせるものであるといふことを忘れてはなりません。

かやうな、運動から來たリズム感情は、やがて、描かれた物の、形の大小に現れる變化色の濃淡、色調に現れる變化等を通して、眼の方から來るリズム感情と融合して、一層こまやかな美感として發達して行くものであります。何れにしても、幼兒は、繪を描くこ

とによつて、美感の土臺となるところの、これらのリズムの快感を味はひながら、一層その美感をこまやかにし、その藝術への憧憬の心の芽生えを伸ばして行かうとするところの強い自然の欲求をもつてゐるものでありますから、子供が襖になぐり書きを始めた時に、無暗に怒鳴りつけたり、叱り飛ばしたりすることをせず、手の筋肉運動を通しての、リズム感情に對する憧憬の芽生え始めた、大事な一時期であることを悟つて、直ちにクレオンと紙とを與へて、その上で、思ふ存分その欲求を満足させてやるやうな、親切な導き方をしなければなりません。この心が、やがて、その子を、麗はしい藝術情操の持主にまで育て上げるところの、眞に教育的な親心であります。

三 幼兒の歌と踊

リズムを喜ぶ心 どの國でも、昔から搖籃時代といふ言葉が使ひ馴らされてゐるやうに、赤ちやんは、搖り籃に入れられて、揺られるものとさまつてゐるやうであります。こ

れは、とりもなほさず、赤ちやんが、そのからだをゆすぶられることを喜ぶものだといふことを示すものであります。必ずしも籃に入れなくとも、抱いてゆすぶつてやつても、泣いてゐる赤ちやんが、泣き止むものであるといふことは、子供を取扱つた者の誰でも経験するところであります。

これは、ゆすぶられる度に、子供のからだに起る、張り切つた感じと、弛んだ感じとの異なつた感じが、一種のりリズムの快感を伴ふからであります。泣いてゐる赤ちやんを、ゆすぶらずに、着物の上から軽くたゞいてやつても、やはり泣き止むもので、これも、われ／＼がしば／＼経験することです。これなどもやはり、たゞく者の手が、赤ちやんのからだに觸つた時と、離れた時とによつて、代る／＼起るところの、緊張と弛緩との感じが、一種のりリズム感情を呼び起して、赤ちやんの心を、氣持よくさせるためであります。

今まで泣いてゐた赤ちやんが、一たび、静かな子守歌を聞かされると、何時の間にか

その泣聲を弱めて、アー、アーといふ抑揚のある歌のやうな聲に變らせ、やがてスヤ／＼と安らかな眼りに入つて行くといふことも、しば／＼見受けるところでもあります。これは子守歌の中に含まれてゐる、高い音、低い音、長い音、短い音、強い音、弱い音といったやうな、いろ／＼のリズムが融け合つて、一つの快いメロデーとなつて、子供のリズム感情を呼び起したからであります。

幼兒の歌 赤ちやん時代に、早くも現れるこのリズム感情は、幼兒期に入つては、ますます複雑となり、お話に、繪に、歌に、踊りに、多種多様な響きを與へつゝ、幼兒の毎日の生活を、楽しく、朗らかに進めて行つてくれるやうになります。その中でも、最も複雑なリズムは、歌の中に現れるリズムであります。

歌を聞いて喜ぶ心の芽生えは、すでに乳兒の時代に現れて居りますけれども、子供が、自分で歌つて喜ぶのは、普通、満二歳頃から始まるものであります。勿論、言葉を充分使へるやうになつてからのことでもあります。それも多くは、周りの者が歌つてゐると何時

の間にかそれを聞き覚えて、子供が自分で歌へる程度の音の高さの範圍で歌ふものであります。その範圍は大低、四度以内に限られ、ド・レ・ミ・ファの音階で申しますとミからソを経てラに至るまでの間位で歌ふことが最も多いものであるとされて居ります。それ以上の廣い範圍にわたる唱歌を聞いても、幼兒は、やはりこの四度以内の範圍に、勝手に狭めて歌つてしまひます。

幼兒の歌は一體、高い音から始つて低い音の方へ移り、それから又高い音へ昇り、再び低い音へ降るといふやうな、高・低・高・低の繰返しが多いものか、それとも、低い音から始まつて高い音の方へ進むといふ、低・高・低・高の繰返しの方が多いかといふことについては、學者の間にも議論のあるところでありますけれども、ドイツの兒童心理學の權威者シュテルンは、高い音から始まつて、低い音へ變つて行くリズムが、幼兒にとつて最も自然な、歌ひ易いリズムであると云つて居ります。

これを我が國の子供の唱歌の例について見ますならば、「カア／＼鴉が鳴いて行く」とい

ふ唱歌の初の方の「カアカアカラスガ」といふところまでのリズムとか、「出た〜月が」といふ唱歌の「デタデタ」のところのやうなリズムがそれでありませう。

これは、歌はうとする子供の氣持が、眞先に、勢こめたエネルギーと、てつき出されて高い音となり、それからその氣持と、エネルギーと息とが一時衰へて、低い音となり、しばらく休んだ形となつた上で、再びそのエネルギーや氣持や息が、甦へつて来て、高い音となるといふ、子供の生命活動そのもの、自然のリズムと關係するものでありますから、自然その生命のリズムに適つた、高い低い、強い弱いといふ順序のリズムの歌の方が、子供にとつて、最も親しみ易く、又歌い易いといふのであります。

歌のリズムから運動のリズムへ 幼兒が歌を歌ふ時、首を振つたり、手を叩いたり、足踏みをしたりして、何時の間にか、歌のリズムに合せた、手拍子足拍子をとつて歌つてゐることを、しばしば見受けることがあります。かういふことは、自分で歌ふのではなく、人の歌ふのを聞いてゐるだけの時でも、時々やることがあります。

これは、音を聞くにつれ、或は歌ふにつれて、幼兒の心の中に、たゞよひ始めたところのリズム感情が、幼兒の全體の心に波打たせて、その波の動きを運動を司る方の心の部分にまで押し及ぼした、めに起つた事柄でありまして、殊に、見るとか、聞くとか、動くとかいふ、いろ／＼の心の動きが、まだはつきりとその働き方を分けてゐないところの、漠然とした幼兒の心には、よくあり勝なことでもあります。

即ち、リズム感情を呼起すやうな音を聞いたために、幼兒の心の中に振り起されたリズム感情が、たちまちその子供の心の全體の動き方を、そのリズムに合せるやうに動かし、始め、その結果、その全體の心の動きと離れることの出来ない關係にある、手や足まで、いつしよになつて、そのリズムの通りに動き出したものであります。

これを手近かな例にたとへて申しますと、こゝに一本の小さな松の木があるといひませう。今誰かゞその木の下枝に手を觸れて、かすかにこれを動かしたとして御覽なさい。さうすると、その下枝につらなる幹が、かすかに震へるでありませう、幹が震へ出したら

今度は、その幹につらなつてゐる他の上枝までが、皆かすかに震へずに居られないでありませう。丁度心の枝にもたとへるべき、聞くといふ動きからしてリズムを備へられたために、その幹にあたる心の大本が、震へ出し、その幹が動いたために、同時にその上枝にもたとふべき手が動き出したといふやうに考へましたならば、これらの関係が餘程はつきりして來るかと思ひます。

かやうな關係で、歌を聞いた時に起されたリズム感情が、手足の運動を起しますと、今度はその逆に、手足の運動のリズムが、心の中にリズム感情を呼起し、その結果、歌と運動との二つのリズムから來る、一層強いリズム感情を心の中に呼起して、幼兒の快感はますます高められて行くのであります。

かやうな、手拍子、足拍子のやうな運動は、歌を聞いた時だけとは限らず、何か嬉しいことが子供の心の中に起りさへすれば、すぐにそれをこの律動的な運動の形で外に表すものであるといふことは、いろいろの場合で觀察されます。

例へば、久しぶりで、郊外散歩につれ出された時など、嬉しくて／＼たまらない氣持を表すために、子供はよく、親の手もとをすり抜けて先走りしては、片方の足を、二度づゝ、續けさまに踏んでは、次に他方の片足を又二度づゝ踏み續け、それを代り／＼やつては、嬉しさうに跳ねて行く姿を、われ／＼はしば／＼見せられることがあります。子供はかうして自分の嬉しい氣持を、足の運動のリズムとして表し、更にそのリズム運動によつて呼び起されるリズム感情を、一層強く經驗しては、ますます嬉しくなつて行くのであります。

幼兒の踊 この運動のリズムを楽しむところの子供の動作が、とりもなほさず、子供の自然の踊であり、ダンスであります。従つて若し大人の考からして、子供の運動の自然のリズムを無視して作つたやうな律動遊戲を、子供に強いるやうなことがあれば、子供の美感の發達を促すどころではなく、かへつて苦痛と嫌惡とを與へて、麗しい美感の發達を妨げることさへ現れるに至るでありませう。